
ソードアート・オンライン ～Clownlike wolf and Girl～

F20C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン ～Clownlike wolf
and Girl～

【Nコード】

N0965W

【作者名】

F20C

【あらすじ】

デスゲームと化したVRMMO、【ソードアート・オンライン】にあって、自由気ままに、紳士的（笑）に生きる男、『ユウ』とビーストテイマーの少女、『シリカ』。

これは、たまたまダンジョン内で出会った二人のハートフルボッコ（良い意味で）ストーリー……なのかもしれない。

シリカちゃん、マジ天使！ な作品に仕上げていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いしますm（ ）m

Prologue (Death Game) (前書き)

どうも、初めましてな方は初めまして、いつも通りこんにちははな方はこんにちはm（　）m
予てより書きたいと思っていたSAO小説に、ついに手を出した作者こと、F20Cでございます。

SAOは電撃文庫版のみの知識しか有りませんが、自分の書ける精一杯の作品にしていきたいと思っております。
感想など、頂ければ幸いです。

ヒロインは、原作の二巻、『黒の剣士』で登場したビーストテイマーのシリカです。
とあるダンジョンで、主人公（変態）と出会うところから、お話は始まります。

今回はプロローグのみではありますが、次回からは本格的にお話が展開していく予定です。

最後に、原作のイメージを壊したくないという方は、ブラウザバツク推奨でございます（＾―＾；）

では、本編をお楽しみくださいませ。

P r o l o g u e (D e a t h G a m e)

12／14800

この世界での命は、数字だ。たかが数字、されど数字。
その数字の量こそが、死という事実までの距離を示してくれる。

11／14800

その数的な命を守ろうと、多くのプレイヤーたちは必死だった。
戦い、強くなり、装備を強化し、自分に突き付けられた死から逃げる。

10／14800

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて……
ルールとしてこの世界のアーキテクチャに規定されている、数字と死の関係から逃げる。

9／14800

逃げ切れるか逃げ切れないか、それを決めるには多くの要素が絡ん

でくる。

この理不尽な世界とルールから、逃げることに。背中に手を這わせてくる、形のない死神から逃げることに。

8／14800

この世界は、シンプルだ。
シンプルで、残酷だ。

7／14800

そのシンプルな世界が閉じる。
閉ざされようとしている。そのシンプルさと、残酷さによって。

6／14800

声が聞こえた。

惚れた女の声だ。守ると決めた女の声だ。

5／14800

だが、それももうじき聞こえなくなる。

俺の世界は、ここで閉じるから。

4／14800

ああ、仕方がないことだ。

後悔も、心残りも……山のようにあるが、仕方がないことだ。

3／14800

これが償いだというのなら、俺はそれに従うしか無い。
それもまた、仕方がないことだ。

2／14800

でも……悪いことばかりじゃない。
良い事だって沢山あった。楽しいことも。

1／14800

少なくとも……今こうして、俺の手に温かい手が触れている。
それだけで、俺の世界の価値としては十分すぎた。



私、綾野珪子ことシリカは【SAO^{サバイバー}生還者】だ。SAO、ソードア
ー・オンラインという名のVRMMO。

まあ、言ってしまうえば超リアルな次世代ゲームのことなのだが、こ
のゲームにおいて生還者^{サバイバー}というような物々しい表現が使われるのは、
らしいといえばらしい表現だと思う。いや、それだけのものが、事
件が、その単語の中には詰まっている。

万人ものプレイヤーを、そのゲームの中に閉じ込め、ゲームの中
での死^{リアル}現実での死という、普通のゲームには絶対にありえないよ
うな、いやあってはならないルールが、このゲームのサービス開始
当日、ゲームを制作した本人から告げられたのだから。

最初期では、その死のルールの真偽について、ゲーム内で様々な憶
測や議論が飛び交ったが、最終的には攻略組や軍、中層プレイヤー、
第一層のはじまりの街でジツとしていることを選択したプレイヤー、
更には殺人や犯罪を楽しむプレイヤー、などなど、大まかに分けて
5つ程度のカテゴリにプレイヤーはそれぞれ籍を置くことになった。

ちなみに私は中層での生活をメインにしている、中層プレイヤーだ
った。生活のために必要な金貨^{コル}を稼ぎ、レベルを少しずつ上げ、何
よりもゲームがクリアされるまでの暇つぶしとして、フィールドに

出て他プレイヤー達とパーティを組んで冒険に繰り出したりしていた。

ハッキリ言って、暇つぶしというのは身も蓋もな言い方だが、実際にはそう言う以外に適切な表現が見当たらなかった。

同時に、その暇つぶしの先にあるであろうゲームクリアという結果を得るための、最も重要な存在である攻略組のプレイヤー、彼らには本当に頭が上がらない。

私は自分の生活と暇つぶしが出来ればそれでいい、だからこそ安全な中層での冒険に集中していればいい。

だが、攻略組はシビア、そして中層などとはレベルが違うダンジョンの中で、本当の意味で命を張ってゲームの攻略を目指してくれていた。

命の恩人と言っても差し支えない人達だ。

そんな攻略組の中にあって、私には二人ほど、よく見知ったプレイヤーがいた。

一人は、ビーストティマーだった自分の相棒、【ピナ】が死んでしまった時、その蘇生を手伝ってくれた黒の剣士、ううん、一日だけのお兄ちゃん、キリトさん。後に、SAOをクリアへと導いたまさに全プレイヤーの英雄のような人。

そしてもう一人……。

その人は、自分の一つ年上で……不器用でちよっよ面倒くさがりで気分屋で、セクハラ魔人で女の子に弱くて、でも本当はとっても優しい人。

セクハラ魔人で女の子大好きなところがなければ、きっと今頃モテていたりするんだろうか……？

む、そう考えると何だか少し面白くない……

あ。言い忘れそうになったけど、キリトさんのように、攻略組に身を置いていて（ちょっと特殊な身の置き方だけど）とっても強い人。SAOをクリアに導いた、全プレイヤーの英雄がキリトさんだとするのなら……彼は……【ユウさん】は……『私だけのヒーロー』になってくれた、そんな人だった。

これは、私とそんなヒーローになってくれた、彼とのお話……

「さてと、今日も頑張りますか、シリぽん」

「シリカです！！」

「おっとこれは失礼。実は俺、かわいい女の子にはあだ名を付けないと死んでしまう病なんだ」

「そ、そんな事言って誤魔化さないでください！！」

ヒーロー………？

うん、多分そう。ヒーロー………なんだと思う、多分。

Prologue (Death Game) (後書き)

ということ、いかがだったでしょうか？

プロログということで、全くお話は進んでいないわけですがΣ（
´A、；）

私の活動報告で掲載した体験版に、新たに追加文章を加えた形では
ありますが、これを今作のプロログとさせて頂きます。

今回は、シリカと主人公の出会いのお話でございます。

掲載は不定期ではありますが、最後までお付き合い下されば幸いです。

それでは、また次回にお会いしましょう。（^| ^）／～

次回 EP1 Encounter

e p l E n c o u n t e r (前書き)

というわけで、第一話でございます。

初主人公登場会にして、シリカさんとの出会いになっております。

あ、主人公は基本的に変態紳士なので、生暖かい視線で応援していただけると嬉しいです。

前置きはこのあたりにして、本編をお楽しみくださいませ m (ー m

e p l E n c o u n t e r

??? side

2024年、9月 第三十三層

ソードアート・オンライン。

世界で初めて、直接神経結合環境システム、通称NERDLÉS技術を搭載した次世代ゲーム機、ナーヴギアの性能を生かしたこれまた世界初のVRMMORPG。

世界初という単語が二回も登場するこのゲームが、ゲーム内での死リアルⅡ現実での死というルールを実装した真正正銘の『デスゲーム』に変貌して二年。

ゲーム製作者、茅場晶彦自らの口から、約一万人のプレイヤーに対して、ただのゲームがそれはそれは恐ろしい『デスゲーム』にビフォーアフターした当初は、それはまあ大変だった。

恐慌状態になる奴や、嘆き悲しんで泣き続ける奴、行き場を失った怒りをそこかしこにぶち撒けるやつなどなど、ある意味人間としては当然と言える反応がそこかしこで見られた。

一昔前の、PC端末をプラットフォームにしていたオンラインゲームならば、画面上のアバターが暴れまわったり、泣いたり、恐慌状態になることはなかっただろう。

強いて上げるならば、ゲーム内でのチャット機能などが大炎上する

ことくらいか。

「ほいっと」

「グギャアアアアア！」

片手剣・垂直四連撃・バーチカルスクエア。正方形のライトエフェクトと共に、目の前にいらっしゃる食虫植物的な意匠のモンスターに、俺の放ったソードスキルが叩きこまれる。

こうしてモンスター相手に、真正正銘の命懸けの戦闘（安全マージンは十分に取っているが）を仕掛けられるプレイヤーが出てくるのにも、それなりの時間が必要だった。

しかし今では、ソロプレイヤーだったりギルドだったりが最前線にて、ゲーム攻略に邁進している程だ。加えて中層のプレイヤーも、日々の飯を食いつなぐため、金を稼ぐためにダンジョンに冒険するくらいだ。

別にこの世界では、生存という目的の上に食事の意味はあまり無いのだが、唯一の楽しみでもある。それを考えると、はじまりの街から一歩も出ないことを選択した連中は、その楽しみを捨てて、安全を取ったと言ってもいい。

中層にせよ上層にせよ、冒険に絶対はないし、100%安全という保証もないのだ。はじまりの街に籠ったヤツらを攻めることは出来ないし、人間の生存本能に従った末の結果に文句をいうつもりもないが。

無論、リスクの面で言えば、本物の『冒険』というのは最前線で戦う奴らの戦いのことを言うのだろうか。

兎も角、人間の環境適応能力というか、慣れというか、そういったものには素直に驚かされる。

「ギュルルルウウ……」

ウネウネと気持ち悪い触手を蠢かせながら、食虫植物を思わせるモンスターがポリゴンを周囲にまき散らしながら消滅する。

モンスタアのHPバーが完全にゼロになったからだ。俺たちプレイヤーも、視界の端にあるHPバーが吹っ飛んでしまえば、目の前のモンスタアのようにポリゴンの瓦解とともに消えてしまう。

いや、モンスタアと比べると、脳を電子レンジ（ナーヴギア）でチンされた挙句に、本当に命を落としてしまう（かもしれない）プレイヤーのほうがHPバーに込められた意味や重みは大きいだろう。所詮、モンスタアなどは、放っておいてもシステム上で再びリポップするのだ。

モンスタアそれぞれに、家庭や子供、結婚を控えた婚約者^{フィアンセ}、会社や奥様同士の井戸端会議などと言ったコミュニティ的概念があれば話は別だが、それはゲームの作りの情熱を向けるベクトルを間違っているとしか言えない。

「うーん……アイテム集めのためとは言え……こんな下の階層じゃ、やっぱり経験値なんてあって無いようなもんだよなあ……あと少しでキリの良い数字になってくれるんだけど」

視界の端に表示された獲得経験値の数値にぼやきながら、俺は腰の

鞘に相棒である、薄紫色の刀身を持った片手剣を収める。

仕方のないこととは言え、ゲームに置いては当たり前のことでもある。レベルが高ければ高いほど、次レベルまでの必要経験値は多くなる。

ずっと同じ階層で狩りをしまくって、永久にフラットなラインを描いて安定したレベルアップなどはあり得ないし、それではゲームバランスがおかしくなる。

まあ、死のペナルティがある時点で、ゲームバランス云々の話を持つてくること自体、若干虚しく感じてしまうが。

兎に角、より早くレベルをあげるためにはより強い敵と、つまりはより上の階層の敵と戦わなければならない。

低階層の敵をいくら屠ったところで、上層での獲得経験値と比較してみるとその差は歴然だろう。

俺も、新しく作ろうと思った防具に必要なアイテムがこの三十三層にあると聞かなければ、こんな階層に来るつもりはなかったのだから。まあ、これもRPGにはよくあること、宿命だと思って納得するしか無い。

「さてと……今はどのあたりなのでしょうかね……と」

アイテム欄から今いるダンジョンの地図を取り出し、現在地と目的地の確認をする。このダンジョンは攻略そのものには全く関係のないものではあるが、すでにアイテムやお宝目当てで訪れたであろうプレイヤーたちによって踏破されている。

内部の地図も、金貨コルを払えばそれなりの物が手に入ったので、探索

は非常に順調と言っている。

日が暮れるまでには、目的のアイテムを入手し、懇意にしている職人プレイヤーのもとに素材アイテムを持っていくことが出来るだろう。……………そう、イレギュラーさえなければ……………。

『きゃあ!!?』

「ああ？」

と、そんな俺の心の声がフラグになったのか分からないが、『イレギュラー』らしきイベントが発生した。

無論、ゲームに規定されたイベントではないだろう、聞こえたのは女性の叫び声。それも俺と早々歳が離れてもいないであろう子供の声だった。

叫び声は、ダンジョンの少し先、目的地へのルートから少し外れたところにあるフロアから聞こえた。

索敵スキルはそれなりに鍛えているつもりなのだが、今の今まで自分以外のプレイヤーに気がつかなかったなんて……………失敗失敗。やっぱり、女の子に履いて欲しい下着について考えながらダンジョンに潜るのは危険だな。今度からは気を付けるとしよう。

ちなみに、俺はTバックは廃止にするべきだと常々考えている。アレは女の子たちから恥らいを、男の子からはロマンを奪ってしまう悪魔の産物であって……………

おっと、気を付けようとした矢先にこれだ。

兎に角、このまま女の子の叫び声を無視して先に進むなど、紳士である俺にとっては論外。念の為に、様子を見に行くでしょう。

「仮に、おっぱいの大きなロリ巨乳な子がモンスターに襲われてるところを、颯爽と助けたりしたら……『キャー！素敵、抱いて！』な展開にも……むふふ」

よっしゃあ！ 待っててね、愛しの子猫ちゅわーん！！

女性の扱いには定評のある、S A O内優しく抱かれない男ランキング、堂々の一位を獲得できればいいなあと、常日頃から妄想しておりますこの私が、今馳せ参じます故！！

え？ こんなダンジョン内では困る？ 任せてください、宿の準備は整っておりますとも。ええ、こんなこともあるのかと今日は勝負下着でございます、はい（赤色のハートマークロゴのやつ）。

こんなダンジョンからは、転移結晶でも使ってパパッと帰っちゃえばいいんです。そしてそのまま、私めというダンジョンに迷ってみてはいかがですか（意味フ）へへへ……

そんなこんなで、気合と妄想、脳内麻薬全開で目標フロアに突入していく俺。

頭の中では、今夜からの素敵な夜の演出とか、女の子が恥じらいながらも自分から装備を外して行って、顔を真っ赤にしてあたふたしている様子までがハッキリとイメージできていた。

「はーい、悲鳴を聞きつけ参上致しました！！ お嬢さん、怖いモンスターなどこの私が一瞬で屠ってご覧に入れましょう。でもって、今日は俺と二人でエメラルドの都までランデブーを……」

「ふえ……？」

危うくルパンダイブ気味な体勢でフロアに突入しそうになったが、それを何とか自制し、フロア内の様子を確認する。

頭の中で何回もリピートして、妄想というあのシュミレーションを重ねた上で弾き出した、落とせるセリフを口にしながらフロアに足を踏み入れた俺……………。

その俺の視線の先に見つけた女の子を目にした瞬間、俺は言葉を失った。

「うう…………と、トラップに引っ掛かっちゃって…………」

「キュルルウ…………」

アイテムが入っていきそうなボックスから伸びる丈夫そうな縄。

その縄によって、両手で両足、胴、太ももが拘束されて動けない女の子。そして、同じように拘束されてしまっている青い色のちびっこいドラゴン。

注目すべきなのは、そのロープの巻き方だ。結び目や、結び模様がその、なんというか…………SMチックなそれなのだ。

トラップによってそうなってしまったのだろう。逆に、自分で縛れ

ただとしたら、この目の前の少女は只者ではない……もちろん、悪い意味で。

そして最後に俺の視線は、最も重要な部分に持って行かれる。果たして、その結果は……

「……………あ、あの……？」

「くっ……！！　せめてもう2サイズ……いや、1サイズ大きければ……！！　でも、気を落とすことはないよ、まだまだ成長期なんだし、後三年くらいしたらかなり化けてるかもしれないし！！　女の子の成長は半端ないからね、夏休みの間に清楚だったあの子が劇的ビフォーアフターしてることなんでざらにあるしさ」

「へ……？　え……？」

そう、俺が最後に確認したのは……ズバリ、スタイル的な要素……。問題は、そのバスト。あ、いや、別に俺はおっぱい星人とかではない。

ただ……そう、一つの女性的な部分の戦闘力の測定という、崇高な目的のためなのだ。うん、そう。そういうことにしておいてください。

残念というか、今後に期待したいところというか……ろりきよぬーと言える大きさではなかった……。駄菓子菓子、胸の大きさだけが女の子の価値じゃないと俺は声を大にして言いたい。

デカけりゃいいってものではなく、その子に見合う大きさ、適切な

大きさかどうかということではなからうかと……!!

これこそが、全世界のおっぱいソムリエ達に備わっているべき、共通の認識なのではないのかと!!

そ、それに……小さいのも結構可愛いじゃない……ねえ?

「取り敢えず、この罨ボックス潰しちゃうから、動くなよ」

「あ……はい……ありがとうございます……?」

と、いつまでも俺のおっぱい談義を続けていても仕方がない。ここは可及的速やかに、囚われのレディを救出せねばなるまい。

俺より少し背が低い、髪を二条に結った女の子。

むむむ? これはかなりレベルが高い……俺のおっぱいスカウターには『今後に期待!』という結果が報告されているが、小さい体に保護欲を刺激される愛らしさ……SAO内では超レアな可愛い女の子プレイヤーだったのだ。

VRMMOというジャンルに飛び込んでくる女の子は、ゼロではないにしろそう多いものではないし、更に美人or可愛いという子に至っては、天然記念物に指定するレベルではなからうか。もちろん、目の前のこの愛らしい女の子も然り。

というか……うん、長々と話してしまったが要するに……俺の好みど真ん中ストライクです、本当にありがとうございました。

「ふむ……？ アイテムと見せかけての偽宝箱か……効果がプレイヤーの拘束だけってところを見ると、そこまで危ないもんでもなかったみたいだな」

「す、すみません………つい、気になっちゃって…気がついたらこんなことに……」

「キュルウ……」

俺の言葉に、女の子はシュンと（ちびドラゴンも一緒に）なってしまふ。そんな姿が、また可愛い。お持ち帰りしたい。

確かに不注意だったとは思うが、階層の低さからきた油断というやつなのだろう。俺にも経験があるので偉そうなことは言えない。あの時は猛毒を浴びてしまって、危うくHPバーがレッドゾーンに突入してしまうところだった。

って、そう言えばこのちびドラゴン……攻撃してこないし、一緒に拘束されてたよな……？
もしかしてこの子……？

「君さ、もしかしてビーストテイマー？」

「あ、はい……。この子は『ピナ』って言います。私と一緒に、罠に引っ掛かっちゃったみたいで……」

「へえ……タイムしたモンスター相手にも有効な罠ってことか……まあ、そこまで大きな意味なかったけど……ねっと！」

ガシャン！！

そんな話をしながら、俺が偽宝箱を蹴り壊すと、女の子を縛り上げていたロープは死んだようにその締め上げる力を失い、地面にポトリと落ちる。

同時に、女の子とピナというらしいちびドラゴンは、晴れて自由の身になった。

ちょっと残念だなと思ってしまった俺は、もう末期なのかもしれない。

「え、えっと……助けてもらって、ありがとうございます。私、『シリカ』って言います」

「いやいや、可愛い女の子が困ってたんだ。助けるのは当たり前だよ」

「か、可愛い……！？」

俺の素直な感想を聞いて、一気に耳まで赤くなるシリカという少女。ゲームに規定されたアバターの表情だとは分かっていても、その赤面ぶりには心打たれるものがあった。

ああもう、可愛いなあ！！

と、シリカが名乗ってくれたのに、俺が名乗らないのは礼儀に反す

るな。ここは紳士的に、クールで鯔背なナイスガイな俺の魅力が伝わるような自己紹介をしなければ。

「俺は『ユウ』。好きなモノは可愛い女の子と昼ドラ鑑賞。嫌いなものは…色々あるから飛ばして…趣味は素数の配列の謎について考えることだ」

「は、はあ……ゆ、ユウさんって……難しいことを考えるのがお好きなんですね……？」

うーん……やっぱこれはやり過ぎだろうか……？　ちょっと数学的なことが好きって事にしておけば、理系なイメージ↓知的なイケメン↓素敵！　抱いて！！　みたいな展開になるかと思ったんだけど……ふむ、やはり人間関係というのは難しいな。

あ、ちなみに素数の配列を考えるのが趣味とかは、嘘です。アレが趣味になっちゃったら、近い未来に俺が廃人化してそうだし……。

「くす……あはは……でも……ユウ……さんって……面白い人ですね……」

俺が今の自己紹介の仕方についてうんうん唸っていると、シリカがクスクスと笑い始める。

???

何がどうなっているのか分からないが、何かがウケたらし。

ま、まあ俺はユーモア溢れる知的なナイスガイだからな、意図しないところで笑いを生んで、それでシリカのツボに入っただろう。ふふふ、今この瞬間、好感度が2は上がったな。

全く…モテる男は辛いぜ……（↑現在、彼女無し・童貞

おいばかやめろ。

兎に角、これが俺、ユウこと沖原おきはら 夕とゆう、マイスイートエンジェル（こう、スピリチュアル的な意味合いで）、シリカとの初めての出会いだっただけだ。

e p 1 E n c o u n t e r (後書き)

はい、如何だったでしょうか？第一話。

シリカと主人公ユウの出会いのお話だったわけですが…書いてて思いました。変態主人公って、なんでこうも書きやすいのかと。

まあ、こんなド変態紳士な彼ですが、決めるところはしっかり決めてくれる………とりたいなあということなので、どうぞ宜しくしてやってください。

今回は、シリカ視点のお話と、新しい冒険に匂い、そして空気の読めないモブキャラの登場になりますので、しばしの間お楽しみ待っていてくださいませ m (_ _) m

次回 e p 2 E n c o u n t e r ?

ep2 Encounter? (前書き)

シリカ視点でのお話になる第二話でございます。

女の子視点って、どうにも慣れないんですね……表現力の乏しさがここに来てはつきりしてきました……(；・、・D・ゝ)

あ、ユウさんは本日も快調に変態してますので、お楽しみくださいませw

ep2 Encounter?

シリカview

その日私は、三十三層にあるダンジョンに生息するモンスターがドロップするアイテムを取りに、単身ジャングルを思わせるダンジョンに潜っていた。

なぜソロで来たのかというと、目的のアイテムというのが街のNPCからの依頼品、つまりはクエストだったわけで、その条件に『アイテムはソロで取りに行かなければならない』という条件があったからだ。

ソロで、という条件に少し身構えてしまった私だが、目的地が三十三層のダンジョンということで、今の私のレベルから10以上も差があることから安全マージンは十分だと判断して、そのクエストを受けたわけだ。

そのクエストの報酬もかなりの額の金貨^{コル}だったので、まあそれなりに稼ぎのいいクエストだったことも決め手の一つだった。

そして、クエストにあったアイテムも、最初にエンカウントした猿っぽいモンスターから一発で取れた私。

探していたモンスターに直ぐエンカウント出来たこともそうだけど、そのモンスターから一発で目的のアイテムが取れた時は、今日の運勢は最高なのではとか、そんなことを考えてしまった。

でも、やっぱりどこかで運がいいと、それに対応して悪いことが起こってしまうのが世の中っていうのかな……ゲームの中なんだけど。ピナと一緒にダンジョンの出口を目指していた私は、ちょっとしたトラブルに遭遇してしまった。

「キャアツ!？」

帰り道、偶然通りがかったフロアに、宝箱を見つけたことがすべての始まりだった。

目的だったアイテムをスムーズに手に入れることが出来た私は、少し欲が出てしまったようでその宝箱のアイテムも頂いてしまおうとか、そういう子供っぽい……もとい、ゲームをする上では当然の欲求に勝てなかった。そう、欲求なら仕方が無いよね……？

でも、欲を張ったバチが当たったのか、その宝箱はトラップボックスで……中から飛び出してきたかなり耐久値の高そうなロープに、あっという間に体の自由を奪われてしまった。

相棒のピナも、同じように縄に捕縛されてしまって、私の傍にコテンと横たわってしまう。

「(しまった……!!　こんな所でモンスターにでも襲われたら!!)」

自動ポップするモンスターも勿論脅威だが、こういったトラップには、罠が作動する同時にモンスターが出現するタイプのものがある。いや、ほとんどがそうなのかもしれない。兎に角、体の自由を奪わ

れた今の私は、とんでもなく悪い状況にあるってことで……。

「……………あれ？」

でも、私の不安に反して、いつまでたってもモンスターはおろか、何のイベントも発生しない。

モンスターポップが設定されていない罠なのか、それともただプレイヤーを縛り上げるだけの罠なのか……後者だった場合、若干S
AOのシステムを軽蔑したくなってしまう。

「?? 足音……? もしかして人が来てる？」

しかしその時、私の耳に、ザッザッザ!と誰かが走ってくる音が聞こえた。足音からして、大型モンスターの類ではないことが分かったが、ホッとしてはいられない。

人サイズのモンスターがフロア外でポップしたのかもしれないし、プレイヤーだったとしても、その人物が友好的だという保証はどこにもない。

私の心音が、そこまで考えが回った瞬間、私の心音が跳ね上がる。まづい……このままじゃ……………!!

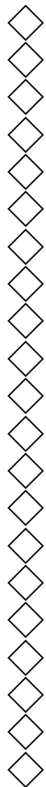
しかし、フロアの入り口から現れた何かは、私の予想を軽く吹き飛ばしてくれた。

「はーい、悲鳴を聞きつけ参上致しました!! お嬢さん、怖いモンスターなどこの私が一瞬で屠ってご覧に入れましょう。でもって、今日は俺と二人でエメラルドの都までランデブーを……」

「ふえ…?」

初見だったけど、とても犯罪者^{オレンジ}プレイヤーとか、殺人^{レッド}プレイヤーには見えないことだけは確かだった。

というより……そう……こう言っただけ……バカっぽかった。



「へえ、ってことはここにはクエストの依頼品を取りに来たわけか」

「はい。でも、最終的にあんなことになっちゃったわけなんですけど……あはは……」

「いやいや、俺も欲張って宝箱に特攻して痛い目にあったことあるよ。猛毒浴びせられた時は、流石に死ぬかと思った」

私を束縛ロープトラップから助けてくれた、ちょっとバカっぽくって、でも話してみると面白い人。
名前は『ユウ』さんと言うらしい。

ここで会ったのも何かの縁ということで、私を三十三層の主街区まで送ってもらおうという話になり、断る理由もないので彼と一緒に、ダンジョン内を出口目指して歩いているわけだ。

ユウさんはパツと見……そう、ちゃらんぼらんな感じで、学校のクラスには一人くらい入るであろう明るいムードメーカーというイメージがとても似合う人だった。
アッシュブラウンの髪がイメージとよくマッチしている。

「ユウさんは、いつもはどのあたりで活動されてるんですか？」

「俺？ うーん……どこかって聞かれると……いろいろなあ……気の向くままにあっちにフラフラこっちにフラフラって感じ。主に、可愛い女の子のいる方向に足が動いちゃうんだよ。今日も、まさにそんな感じなわけで」

「そ、そんな事言って……からかってるんですか……？」

「まさか。俺は可愛い子には嘘は吐かない」

という感じで、私のことを可愛いと言ってくれる。

正直、悪い気はしない……でも、そういうプレイヤーは今までも沢山いた。やれ一緒にパーティを組んで欲しい、やれ男女として付き合っって欲しい、拳句の果てには結婚してくれなどと言ってくる人は大勢見てきた。

SAO開始時、私はまだ13歳で、学校でも男の子にそんな事を言われたこともなくて……正直ものすごく怖かった。

考えてみれば、このゲーム内で本当の意味で好意的に接することが出来たのは、黒の剣士……あのキリトさんくらいじゃないだろうか……。

自分が妹に似ているからという理由で、手を差し伸べてくれたあの
人だけ……。

「（この人も、他の男の人と一緒にのかな……？）」

なんて、そんな事を考えながら、隣を歩くユウさんをチラリと見る。
服装は一言で言えば軽装。フード付きのくすんだ黒色のジャケット
に、現実^{リアル}で言う所のジーンズのようなズボンだ。膝などには金属製の
装甲がところどころについてはいるが、それでもパツと見の防御
力は大したことないように見えてしまう。

ロングコートで身を包んでいたキリトさんのほうが、まだ打たれ強
そうだった。

加えて、武装は腰に差した片手剣一本。鞘に包まれており、その刀
身を確認することはできないが、初見では業物のようには見えない。
もちろん、キリトさんのことがあるから、武装も防具も見た目が地
味なだけで、その実は物凄い業物、レア防具、強力装備なのかもし
れないけど。

「ん？ どったの？」

「あ、いえ…！ 別に何でも…！」

と、ちょっとジロジロ見つめすぎちゃったみたい……。

ユウさんが頭にはてなマークを浮かべながら、私にそう尋ねてきたけど、少しどもりながらも私は何とか返事を返した。

すると、ユウさんはそこから何を連想したのか……

「ま、まさか……俺に一目惚れ！？ ふ……やはりこの全身から漲るイケメン・ナイスガイオーラに君も気がついてしまった……」

「あ、そういうわけじゃなくて」

「ですよー」

助けてもらったのは確かだけど、一目惚れっていうのはない。

まあ確かに、ユウさんはナイスガイ……というのか、かなりカッコイイと思う。でも、どこか軽薄というか、飄々としたところがあるからか、今ひとつ信用し切れなかった。

本当に、助けてもらっておいて生意気な話なんだけど……。

「うう……負けたわけじゃないやい……戦略的撤退を敢行しただけだもん……その内、友達100人ならぬ、嫁さん100人できるか

な状態になってみせるんだもん……あ、いや。その場合、夜のお仕事が大変なことに……うん、やっぱりお嫁さんは一人だな。ハーレム反対！！俺はミスター・一途を貫くもんね！！リア充爆発しろー！！」

「あはは………」

私のリアクションに、ユウさんは地面にの字を書きながら、ちょっといじけてしまう。

ちよっと悪いことをしちゃったかなと思った……んだけど、次の瞬間にはさっきと同じようなテンションに戻って、元気いっぱいになんぷうに叫んでいた。

モンスターに見つからなかったのが不思議だった。

私がユウさんに抱いた第一印象、それは一目惚れでも、カッコイイとかでもなく、軽薄な人というのでもなくて……。

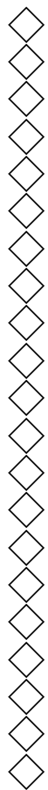
「うーん……でも、このクールで鰯背なナイスガイな俺に、何で彼女の一人もできないのか……。曲がり角でパン加えた女の子と正面衝突もしないし、空から女の子が降って来たこともないし……いや、まさか……これは……SAOのバグ！！？　なぐるほど、そうかそうか……バグかあ。バグならしょうがないな、こればかりは俺がどうしようと思ってもなんともならないしな、うんうん！！……あれ、何でだろう……？　前が霞んで見えないや………」

「あはは…！ 何だかユウさんって………変な人ですね？」

そう。カッコイイのに、それが台無しになっちゃうくらい変な人。話してるとおもしろくて、いつの間にか一緒になって笑っちゃう………そんな人だった。

まだ会って間もないし、少し話ただけだけど……

どこか、キリトさんみたいに他の男の人とは違う何かを、私はユウさんを感じていた。



そして時刻は夕方に差し掛かった頃……

私とユウさんは三十三層の主街区に到着した。途中でモンスターにエンカンウントせずにここまで来なければ、もう少し遅くなってしまうかもしれない。

モンスターに遭遇すれば、ユウさんの实力を見れたりするんじゃないか、とかそんな事を考えていたんだけど、やっぱり楽に帰れるに越したことはない。

まあ、流石にユウさんが『転移結晶使って、パパッと帰らない？』と言ってくれたときには、流石に遠慮してしまったけど。

「で？ クエストの依頼主ってのは？」

「すぐその通りの民家のNPCです。モンスターがドロップするアイテムが、腰痛のための薬に効くとかで……」

「へー、聞いたこと無いクエストだな……って言っても、SAOのクエストの数なんて数えるのも嫌になるくらいにあるけどな」

「確かにそうですね。私も結構いろんなクエストに手を出してきましたけど、全体の3%にも達してないと思いますから」

私たちは、その足でクエスト依頼品を、クライアントであるNPCに届けるべく、主街区の大通りを歩いて行く。

ビーストテイマーである私は、やっぱり今でも中層では名前が出回っているらしく、度々プレイヤーだと思われる人達からの視線を感じた。傍を飛んでいるピナが存在が、ビーストテイマー足る何よりの証拠になるので、視線を送られるのはすでに慣れっこだ。

加えて、今日はそばを歩くユウさんの方にも視線が飛んできている。こちらは、あまり友好的な視線ではなく、懐疑的な、疎ましさを含んだ視線のように感じられた。

多分、ユウさんが他のプレイヤーから抜け駆けして私とパーティを組んだと思われるのだろう。

実際、何組かのパーティから一緒にやらないかという誘いは受けていたから、何となく分かってしまった。

「へくち!! ずず……いかんいかん……また美女が俺の噂をしてるに違いない……全く、モチ期全盛期の俺の戦闘力は化け物か……」

：（一、四一、）キリッ」

「キュル、キュル」

「え？ 『そんなわけねーだろjkww』 って？ ちょww ピナ先輩ww 俺マジ傷つくんですけどww」

当の本人は、飛んで来る視線に無関心なのか、気が付いていないのか、こんな感じなのだけど……。
というか、くしゃみが男の子っぽくないくらい可愛いものだったの
で、少し可笑しかった。

あと、ピナとナチュラルに会話してる人、初めて見たかも……。う
ん……。やっぱりユウさんって謎な人……。

「はい、おばあさん。これが頼まれてた薬草です」

「おお、これこれ……本当に有難うございます、お嬢さん」

「いえいえ♪」

そして、目的地の民家に到着した私は、直ぐにアイテムボックスから依頼品だった薬草をオブジェクト化し、クライアントであるおばあさんに手渡し、約束の報酬を金貨コルで手に入れることが出来た。メ
ニュー画面の金貨残高に報酬分の金額が追加されたのを確認した私

は、メニュー画面を閉じる。

ゲーム内ということは分かっているのだけど、やっぱりクエストをクリアして人の役に立てた時は、少し心が暖かくなる。

今なら、現実^{リアル}でも同じように人に親切にできるかな……？

とそんな事を考えながら、報酬をもらったことだし、お暇しようかなと思ったその時だった。

おばあさんが、私の隣で立っていたユウさんに声を掛けてきた。

「そっちのお兄さん、ちょっとお待ち」

「ん？ 俺か？」

「ええ。お兄さんの持つとるその黒い縄、ちょっと見せてくれんか？」

「おお、いいぜ。どうせ後で処分するつもりだったしな」

おばあさんにそう言われ、ユウさんはメニューを呼び出し、アイテム欄から黒い縄を取り出す。

その縄は、さっき私とピナを拘束していた偽宝箱から伸びてきた、やたらと耐久値の高い縄だった。

「ユウさん、あの縄……」

「ああ、何かに使えるかと思って失敬しておいた。まあ、ただの頑

丈な縄だしなあ……売れるなら売って気持ちだったんだけど。あ、避ければシリボン、一人SMプレイ用にどう？」

「い・り・ま・せ・ん！！！！　ていうか、ユウさんの中で私の性癖どうなっちゃってるんですか！！？」

あの耐久値の高い縄。どうやら偽宝箱を壊した瞬間、ドロップアイテムという扱いになるらしく、それをユウさんが回収していたらしい。

それが、こんなところでおばあさんの目に留まるとは、私もユウさんも考えても居なかった。

ていうか、ここでハッキリさせておきたいことが1つだけある。

私は、SMプレイが好きとか、そんな事実は一切ありません！！

「やっぱりねえ……ここ縄は、『リーヴルの糸』で作られておる……。まさかこの目であの素材を見えることになるとはねえ……」

「『リーヴルの糸』……？」

私もユウさんも、どうやら聞いたことのないアイテムの名前だ。とていうか、この一連の流れ……もしかして何かのフラグが成立したのかな……？

あの薬草と、薬草を取りに行った帰りに遭遇した、罠トラップ。トラップに使われた縄を回収、そのまま依頼品をおばあさんに渡したとき、アイテム欄に黒い縄があれば、その縄に使われている特別な

アイテムの情報を教えてくれるという形の……。

ユウさんも同じ結論に至ったようで、私のことを見て、コクリと頷いた。

「リーヴルの糸は、ええ〜と、確か41層にある、なんとか密林に自生しとる……植物だったか……？ 兎に角、それからからごく少量取ることが出来る、幻の糸のことだよ。軽くて頑丈ってことで、これを使えば質のいい防具が作れるだろうねえ……」

そう言ってから、おばあさんは黒い縄をユウさんに返した。

そこで会話イベントが終わったようで、おばあさんはそれ以上のことは喋らない。

私とユウさんは、それを確認すると足早に民家を後にした。

「リーヴルの糸……ねえ……」

「意外なところで、良い情報頂いちゃいましたね？」

「これも、シリぽんが縄に緊縛プレイされてくれたおかげだな」

「シリカです！！ ていうか、緊縛プレイってなんですか！」

「え？ 緊縛プレイって言ったら……お前……縄を使ってだな……
ってアイドルの俺にそんな事言わせるなんて……事務所が黙っちゃ

いないわよ!!」

「そ、それ以上はいいです……!」

民家を後にした私とユウさんは、手に入れたばかりの情報のことを考えながら、大通りを歩いていった。

主街区に帰ってくる前の道すがら、主街区に着いたら宿屋で食事でも、ということになっていたので、目的地はこの街の宿屋というわけだ。

「というか、ユウさん……私のことからかって楽しんでるのかなあ……軽くあしらわれちゃう、私も私だけど……。あと、なんでオネエ語？」

「うーん……この黒い縄、そのリーブルの糸とやらには戻せないっぽいし……防具を作る材料にして使うには、実際になんとかつつう密林に言っ、アイテム素材をかつ攫って来るしかないみたいだな」

「ですね……それに、この縄の耐久値から考えても、リーブルの糸で作った防具なら、かなりの防御力の上昇が見込めますよ?」

「幻の糸、と言われるだけあって、それから生成されている縄の耐久値の高さはもの凄く高い。」

「防具を作れたと考えたなら、その性能は折り紙つきだろう。」

「ちょっと、そのダンジョンに潜って、リーブルの糸を採取してみたなあとか……そんな事を思わず考えてしまった。41層なら、

ぎりぎり安全というところ……パーティを組んで行けば、何とかいけるんじゃないかと……。

「行ってみる？ この糸取りに？」

「ふえ？」

と、そんな私の心を読んだみたいに、ユウさんがそう提案してきてくれた。

ユウさんの表情は、新しいおもちゃを手に入れた子供みたいに明るいものになっていて、恐らくまだ見ぬレアアイテムゲットのチャンスに、燃えてしまっているみたい。

あはは……男の子のこういうところって、私案外嫌いじゃないかも……

「いや、実はさ……俺、この層には防具に必要な素材を集めに来たんだけど。話を聞く限り、生地に関してはリーブルの糸とやらを使ってみるのも面白そうだしさ。どう？ シリリンさえ良ければ、一緒に行かない？」

「シリカです！！ って……さっきとあだ名違ってるし……まあいいですけど……。そのリーブルの糸の採取と一緒にいくのには、私からもお願いしたいです。それに、今日ユウさんに助けてもらったことに恩返ししたいですし」

私としても、ユウさんに助けてもらったことに対して、何かしらお返しをしたいと思っていたところだった。
私の短剣使いとしてのスキルも、かなり上がってきたし、ピナという心強い相棒もいる、

自分の力が役に立つのなら、ユウさんに何か恩返しがしたかった。
ユウさんの方から誘いがきたのは、正に渡りに船というところだった。

「そっか♪ 早速明日から行ってみようか？ 取り敢えず、今日はもう時間も時間だし、休むとしてさ」

「はい！♪」

「んじゃ、今日はディナーを一緒にしつつ、明日からの計画とかを立てるとしますかね……」

ユウさんとの糸採取を巡る冒険。

それも、目指すのは未だ見たことのないレア素材だ。

否が応でも、私のテンションは修学旅行前日のそれに近いものになってしまい、気持ちのいい心の昂ぶりを覚えた。

久しぶりに、楽しいことが起こりそう。そんな予感さえした。

だが、そんな楽しい気分が、背後から掛けられた声で台無しになっ

てしまう。

「おい、シリカちゃん……俺様からのパーティ加入の話断っておいて、それはないんじゃない？？」

「っ……」

「ああ？」

その声に聞き覚えのある私は、表情を嫌なものにしながら、全然全くもって聞き覚えのないらしいユウさんはそう呟きながら、声の聞こえた方向に視線を回す。

ああ……こんな楽しい気分の中に……なんでこんな人に見つかったやうのかなあ……？

今日は運勢イイ感じの日だったのに……

「俺様、ブラウンシユバイク様のお誘いより、そっちのお友達のほうがいいってわけ……？」

私とユウさんの視線の先には、スパークしたような金色の髪を、ロングに伸ばしたパツと見はもの凄く美形な……でも、体全体から漂う軽薄且つ、粗暴なオーラが私の神経に一々触るような男……。

中層ではかなり名の知れたプレイヤー、ブラウンシユバイクの姿が

そこにはあった。

「ほお、中々のイケメン……まあ、俺様ちゃんほどではないが」

ユウさん、そういう事は自分で言わないほうがモテますよ？

それは兎に角、どこか嫌な空気が……街の一角で漂い始めていた………

ep2 Encounter? (後書き)

如何だったでしょうか？第二話。

嫌なやつ、SAO本編で言うクラディールのポジシヨンのキャラが出てきましたねw

名前がムダに長くてゴツイ感じがミソです。ええ、言ってしまうば

……雑魚でございます。

ユウの初戦闘は、これより二話先となり、次回は一悶着の始まりをお届けしたいと思います。

次回 ep3 Provocation

ep3 Provocation(前書き)

今回、ユウさんの変態度は少しだけなりを潜めます……………

潜められている……………かなあ…? Σ ($\forall$ 、 ;)

それはそうと、今月発売の碧の軌跡というゲームを予約してきました ($\forall$ 、 * $\exists$) エヘヘ

前作でサブキャラだったメンバーが、主要キャラに昇格してるみたいなので、かなり楽しみですww

では、本編をお楽しみくださいませm (| |) m

ep3 Provocation

【ユウ視点】

カワイイ系美少女、シリカとの楽しい会話、そしてデートの…もとい、俺も聞いたことがないようなレア素材を求めている冒険の約束を取り付けた俺。

あ、いや、別にヤラシイ目的があってこの女の子に近づいているわけじゃない。

そう、美少女だからだ。

男の子なら、そこに美少女がいれば、特攻するのが花道というものであって、俺もその古から伝わる真の漢道に則ったまでのことだ。他意はない……いや、ほんとに無いんだって。

それはさて置き……、内心では全俺がスタンディングオベーションしていたまさにその時。

俺とシリカの背後から、突然野郎の声が飛んできた。

「おい、シリカちゃん……俺様からのパーティー加入の話断っておいて、それはないんじゃない……?」

「っ……」

「ああ?」

いきなりの野郎の声、しかもこのチャライ喋り方は、俺の神経に色々触ってくる。

見れば、シリカは嫌な人に見つかった…というような顔をしており、あまりこの声の主には良い感情を持っていないようだ。

仕方なく、俺とシリカは声のする方に視線を向けるが、そいつの顔を見た瞬間、シリカが嫌な顔をする理由の99%を理解できてしまった。

「俺様、ブラウンシュバイク様のお誘いより、そっちのお友達のほうがいいってわけ…?」

俺たちの視線の先には、金ピカに染まった腰まで掛かるほどの長髪。前髪あたりはオールバックにしている見た目はかなりのイケメン男だ。

イケメンなのは、まあこの俺様も認めてやってもいいのだが、この男の目は腐りきっているの一言に尽きた。

そして、最大の特徴……それは……。

「ねえ、ブラちゃん…♪ またこの子誘うつもりなの?」

「一回断られたんだしい、もう相手しなくてもいいじゃない」

「まあまあ、そう言うなよマイハニー達……。きっとシリカちゃんも、俺様みたいな二枚目の剣士に見惚れられて照れてるだけなんだ

よ……ここは、年長者として俺が折れて行かないとダメなところなんだ……」

そう、この男……女の子を二人を侍らせるわけですよ。

しかも、マイハニーときている……あれ？ 誰かと似ているような気がするが気のせいだ。

はい、どう見てもリア充です。本当にありがとうございました。

ていうか何なんだこいつは……？ いきなり現れて、シリカをあくまで上から目線でパーティに加入させようってことらしいのだが……シリカにはそのつもりは全く無いようだ。

「あの……！ お誘いしていただくのは光栄なんですけど、しばらくはユウス……この人とパーティを組むので……。それに、以前に一度お断りした話なので……ゴメンナサイ」

そんなナルシー&キザ男、加えてリア充なこのブラ……ブラウンな人とかに對し、シリカは努めて丁寧に対応する。

この年にして、中々出来た子だ。うんうん、お兄さんの好感度は10ポイント加算されましたよ？

VRMMO、いや一昔前でのオンラインゲームでも、その他ネットコミュニティにおいても、マナーや礼儀などは騒動の発端になることかしばしばあった。

それこそ、酷い時には殺人事件に発展することだってあったほどだ。それ程に、ネットというアーキテクチャが現実リアルに近づいて来ているという証拠なのかもしれないが。

兎も角、リアルでもネットでも、同じようにマナーや礼儀というものは、お互い守って然るべき……というのが、良心的なネットユーザーの考え方であり、SAO内でのプレイヤーもその辺りを弁えている人は多い。

だがまあ、いつの世の中にも、今のようにゲーム内にも、その限りではない連中というのはどうしてもいるわけで。
このブラ……ブラなんとかも、そんな連中の一部だった。

「ちょっと!! ブラちゃんが折角誘ってくれてんのよ?? 素直にいう事聞いてりゃいいのよ!!」

「そうよ!! なに? ちょっと可愛いからって調子に乗ってるわけ?」

「そ、そんなこと……無いです……」

こういう時、女の子は怖い。というか、一気に捲し立てるように責められると、誰だって混乱、または怖気付いてしまうものだ。

シリカは、もともと気の強い方ではないようなので、よっぽどだろう。

そんな困っている彼女を……やっぱり紳士な俺としては、ただ見ているだけというわけにはいかないわけで。

ここは、ネゴシエーター・ユウと呼ばれた（実際は呼ばれたこと無いけど）この俺の華麗な交渉術で、この場を丸く収めるとするか……

「まあまあ、お嬢さん方々♪ そんなに目くじら立てないで、魅力溢れるお顔が、その輝きを損なっちゃいますよ?」

「な、何よあんた……?」

「ただのしがない剣士でござーます。今回は、僭越ながらこのシリぼんの護衛を仰せつかった者でしてね……」

「護衛? この子の……?」

「ああ、そう言えばさっき、ダンジョンがどうか言ってたわよね……?」

よしよし。まずは好感触……興味の対象をシリカから俺、でもってダンジョンの方向にずらしていけそうだ……。

このお姉さん方だけでも、シリカから遠ざけてやりたいとこだ……
……。出来るだけ謙った態度で、相手の感情を逆撫でしないようにせねば。

でも、物事はやっぱりうまく思い通りには進まないもんで……

「ああ? 野郎に用はねえんだよ! さっさと失せろや!」

「んだと、このエセハーレム野郎が?! 失せるならオメエが失せろ、そのウザったい金髪ロンゲ、見てるだけで背中あたりが痒くなるんだよ!!」
メンズ○ゲン・ワンプッシュで真っ黒にしてやる

うか!?!?」

あ……………しまった……………。

そう思ったときには時すでにお寿司、いや遅し。いきなり会話に割り込んできた、ブラナントカに対して、俺は勢い良くそう言い放ってしまっていた。

自慢ではないのだが、実はこの俺……………紳士的に対応するのは……………
…女の子だけなのである!!

「野郎……………いい度胸してんじゃねえか……………」

「……………コホン…お前よりかは肝座ってる自信があるさ……………この
リア充野郎……………羨ましいんだよコンチクショ…俺なんか、まだ
彼女も……………グスン……………。と、とにかくだ、シリぽんはお前のパーテ
ィに入る気はないって言ってたんだ、潔く身を引いたほうが、ダサく
なくていいと思うけどね」

あ、いや……………決して妬ましいからとか、そういう理由で突っかった
てるわけじゃない。本気でシリカに対して迷惑なやつだからこそ、
ここまでイラついているのだ。

シリカは、俺とブラなんとかの間に立ち込め始めた、嫌な空気を感じ
取ったようで、少し不安な表情をしまっている。

なんということか、紳士であるこの俺が美少女を不安にさせてしま
うとは……………。

それもこれも、この目の前の金髪ロング・ブラ……………何とかのせいだ。

兎に角、もうすでに紳士的な対応でこの場を上手くやり込めて、シリカの好感度を上げちゃうぜ作戦は完全に暗礁に乗り上げてしまった。

さてさて……残る手段は……

「ユウさん……！ その人、中層プレイヤーの中ではかなり強い人なんです。レベルも60近いとかで……だから、あんまり刺激しないほうがいいですって！」

「へえ……そいつは確かに立派な数字だな」

俺の服の裾を、クイクイと引きながら目の前の金髪男・ブラ何とかについて教えてくれるシリカ。

俺としては、服を遠慮がちにクイクイと引いてくるその仕草に、危うく萌え殺されそうになったが、あくまで平静を保ったままシリカに応える。

ホント、何でもこう年下のちっちゃい女の子は、こうも一つ一つの仕草が可愛いのだろうか……？ スタイル抜群なお姉さん系美人には無い魅力と言っていだろうか。

取り敢えず、心の中でだけシリカにこの言葉を贈っておこう。

『シリカちゃん、マジ天使』と。

「ま、そーゆーことだ。シリカちゃんはお前みたいな雑魚じゃなく、俺様みたいな一流プレイヤーと組んで然るべきなんだよ。雑魚は雑

魚らしく、下層で芋でも耕してろ」

自分のレベルの高さを、シリカ自身の口から聞けたのが嬉しかったのか、ウザロン毛（ウザイロン毛の略）は自分の前髪を、演技がかった仕草で掻き上げる。

その行動に、俺の中のイライラメーターがその数値をグンッと上昇させた。

まあ、60というレベルは確かに大したものだ。そこは認めておこう。

実際、シリカの口ぶりから、少なくとも彼女よりもレベルは高いはずであろうことは予想できる。

だが、だからといってパーティ加入を強制していい理由にはならない。

シリカが組みたくないと言っているのだ。だったら、俺はその意見を指示してやりたい。

シリカ自身が決めたことを。

「生憎と、ハイそうですかって、シリぽんを差し出すつもりはないね。この子が嫌って言うてるんだ。あんたこそ、さっさと諦めて、そこのお姉さんたち連れてホームでニャンニャンしてりゃあいだろ」

「あの……私の名前シリカで……うう、もういいです……」

シリカが後ろでゴニョゴニョ言っているが、生憎と俺の耳はそれを

上手く拾ってくれなかった。

さて置き、目の前のうざロン毛は俺の言葉が神経に触ったようで、SAOの感情表現によりかなり怒っている表情を作り出す。

普段は二枚目な男前で通っているらしいが、案外火が付きやすいタイプらしい。まあ、俺も人のことが言えた方ではないものの、感情のコントロールはこいつより上手い自信がある。事実、先ほどのガラの悪い物言いをした俺だが、心の中は落ち着き払っている。

「どうしても……その女渡す気はねえってか？」

「ああ、無いね。つうか、この子は俺とパーティ組んで冒険するって言ってくれたんだ。パートナーを守るのも当然だろ？」

「はあ……そうかよ、だったら一回痛い目見てから、言い直したほうがいいかもなあ!!？」

その瞬間、ブラ何とかはメニューを呼び出し、何かしらの操作を行う。

まあ、大体の予想は付いていたのだが……その予想が現実になった時、俺は表面上は面倒そうに溜息を吐いていたが、内心では『バーカ♪』とほくそ笑んでいた。

【ブラウンシュバイク から1VS1のデュエルを申し込まれました。受諾しますか？】

俺の目の前に、半透明のシステムメッセージが表示された。内容は上記の通りで、要するに一对一でガチンコしようぜ、ということだ。実に分かりやすく、シンプルかつ俺向きの展開だ。

こうなるように目の前のバカ金髪を誘導するのに、どの位手間が掛かるかと考えていたが、相手は俺の予想よりもはるかにバカだったようだ。

「っ……………！」

「おお？　なんだあ？！　デュエルってことでビビッちまったのかあ…………？　はっ！　やっぱ、口ばかりの雑魚かよ…………まあ、街の中のHP保護効果が無くなっちまうんじゃあ、ビビリにはちと辛いかもしれねえけどなあ…………」

が、俺はあえて自分好みの展開になった事に対して、表情にはそれを出さない。逆に、少し怖気付いたような表情を浮かべて、敢えて足を一步後ろに後ずさりさせる。

こうすれば、相手は自分が圧倒的優位に立っていると誤解したまま、心に慢心と余裕というデュエルやモンスターとの戦闘においては、あつてはならない感情を増長させる。

相手の心理を、自分にとって優位に持ってくることは、モンスターのAIを誘導する技術によく似ているが、人間相手のほうが遥かに簡単で、得られる効果も高い。

「な、舐めんなよ……！　良いさ、やってやる……！」

「ユウさん!!」

【ブラウンシュヴァイクとの1V1のデュエルを受諾しました】

言いながら、俺は【初撃決着モード】を選択し、ブラウンとかからのデュエルを承諾した。うむ、我ながらなんという役者っぷりか。ヘタレ男を完全に演じきっている。

これならば、どこかの映画祭で主演男優賞とかもらえる……いや、そうだったら世の中の女性たちが俺に釘付になってしまうではないか。うん、社会的混乱を未然に防ぐという意味を兼ねても、俺は芸能界入りはやめたほうがいいな、うん。

話を戻そう。

ここで完全決着モードでも選ばうものなら、折角誘導した相手の油断や慢心が無駄になってしまう。

片方のHPがゼロになるまで戦うモードという勇ましい選択してしまえば、さっきまでの俺の怖気付いた様子と矛盾してしまうからだ。

シリカが慌てた様子で俺の名前を呼ぶ。

まあ、見てなって。このデュエルが終わる頃には、今日のベッドで寝る時に、俺という枕と一緒に布団に入りたいという気持ちにさせてみせようじゃないか。

そして二人のめくるめく夜を……おおっと、イカンイカン。今からデュエルだったのに。夜のデュエルのことを考えるのは後にしよう。

「へへ……あつという間に秒殺してやんよ………」

「っ………」

デュエルのカウントが始まると同時に、ブラなんとかは、『派手』という単語をそのまま形にしたような片手剣を背中から抜き放ち、臨戦態勢に。

俺もまた、ビビリを装いつつも、腰から相棒である薄紫色の刀身を持った片手剣を抜剣する。

構えにも、少し怖気付いた感を演出し、腰が引けているようなイメージをもたせる。

それを見て、アホ金髪だけではなく、いつの間にか集まってきたギヤラー達も、ブラ何とかの勝利を確信したのか、あーだこーだと騒ぎ始める。

俺がここまでダメ男を演じてまで、ウザロン毛の油断と満身を引き出すには、それなりの訳があるのだが……それはまた次回にでも説明させていたどころ。

「ユウさん………」

「大丈夫だよ、そこで見てな」

シリカに、周囲に聞こえないくらいの声で呟き、相手を正面に迎える。

金髪ロン毛野郎は、武器の強化と装飾のベクトルを間違っている
しか言いようのない剣を、オーバーアクションで振り回してから、
中段で構えて、少し体の重心を落とす。

どうやら、言っていた通り、俺を速攻でぶちのめすべく、突進系の
技で掛かってくるつもりらしい。

こいつ、デュエルの数はそこそこなしてるみたいだけど、今まで
格下とばかりバトってやがったな……？ 器の底が見えたな。

「女の前で、たっぷり恥かせてやる……くくく……」

「くそっ……！ やってみろ……！」

そう、ヘタレ男を演じる俺と、金髪バカが言い合うと同時に……。

【DUEL!】

と、一桁になっていたカウントが、紫の閃光エフェクトを伴って弾
けた。

デュエルの始まりが、宣言された……

ep3 Provocation (後書き)

いかがだったでしょうか？

今回はデュエルの下準備。ユウさんが、ブラウンシユバイクなるDQNをボコるための準備という感じで、次回から戦闘です。

と言っても戦闘は一瞬で終わってしまうのですがWWW

次回 ep4 Duel

今回は、シリカちゃん視点でございます。どうぞお楽しみに！ノシ

ep4 Duel (前書き)

さてさて、今回は戦闘、デュエル回でございます。

とは言っても、勝負はかなりアツサリ付いてしまいましたがww

どうでもいいことですが、そろそろ秋季アニメの新作のPVが出揃って来ましたねw

秋の視聴予定番組は、ペルソナ4、僕は友達が少ない、ましろ色シンフォニー、灼眼のシャナ?、境界線上のホライゾン、C3……

お、多いです……それに加えて、夏からの継続でぬらりひよんの孫とか見るので……全く、秋のアニメラッシュは地獄だぜー!!

e p 4 D u e l

【シリカ視点】

——三十三階層・主街区

多くの中層プレイヤーの行きかう街並みの中、ポツカリと空いた穴。穴というか、単にとある目的のためにギャラリーとなった人達を作ったスペースにほかならないんだけど、そこは余り重要じゃない。

言っでは失礼かもしれないけど、派手派手且つ、肉厚な刀身を持った片手剣を中段に構える金髪を長く伸ばした、軽薄なイメージが先行してしまうブラウンシュヴァイクさん。

そして、その彼に対峙するように立つのは、今さっき、一緒にパーティを組んで冒険しようということになった、変な……もとい面白い人。名前はユウさんだ。

ブラウンシュヴァイクさんの剣に比べて、ユウさんの薄紫色の刀身の片手剣は、刀身はそこまで分厚くない。

もう少しでレイピアの部類に入ってしまうのではないかと思われるくらいに、少し細い。

「ああ…どうしよう………ブラウンシュヴァイクさん相手にデュエルだなんて………」

そう、多くのプレイヤーたちがギャラリを決め込むのは、今からこの二人が一对一の勝負、所謂デュエルを始めようとしているからだ。

ブラウンシユヴァイクさんは、中層プレイヤーの中ではトップクラスのレベルを誇っているらしく、実力の高さはそのレベルが物語ってくれる。

レベル60も目前に迫っているという噂もあるくらいなので、かなりの強者と言える。

対して、ユウさんは……よく分からない。

私自身、会ってまだ数時間だし、どこをメインの活動階層にしているのかとか、ホームはどこなのかとか、そういった込み入った話は殆どしていないので、周囲のギャラリたちとは情報力的な見方からすると、そう差はないと思う。

私をダンジョンで助けてくれた……変だけど、面白い人。
それくらいしか分かっていることはない。

「（ユウさんの構え、腰が引けちゃってるし……これじゃあ勝負にならないよ……）」

私から見ても、ユウさんの構え方には心強さなどは微塵も感じられない。

目の前のデュエル相手に完全に臆しているような、腰の引けた構え。剣先など、少し震えているように見える。

デュエル決着の仕方は、初撃決着モード。最初に強攻撃をヒットさせるか、相手のHPを半分まで削れれば勝ちというルールなのだけ

ど、やはりそれでも恐怖は抜け切らないのかもしれない。

この世界では、HPがゼロになれば現実^{リアル}でも死ぬ……かもしれない。HPがゼロにならないまでも、半分まで削られるだけでも、かなりの恐怖体験だと思う。

それを思えば、ユウさん今の状態も、何ら不思議じゃない。

周囲のギャラリーも、ユウさんの状態を見てか、私と同じ事を考えているみたい。ただでさえ、その強さが証明されているブラウンシユヴァイクさん相手なんだ。

きつと皆、ユウさんが瞬殺されて終わりだと思っているに違いない。私自身、そんな事を考えてしまっている。

「ユウさん……」

「大丈夫だよ、そこで見てな」

私の小さな呟きに、ユウさんは引け腰なのに、妙に余裕のある様子でそう答えてくれる。

あれ……？ ユウさん……全然ビビってない感じみたい……。寧ろ余裕シャクシャクっていうか……。でもでも、パツと見かなり及び腰で、ブラウンシユヴァイクさんに対して少しビビっちゃってたし。

うーん……？

そんな私の心配を他所に、二人の間のデュエル開始までのカウントダウンの表示は、どんどんとゼロに近づいていく。

ブラウンシュヴァイクさんの構えは、傍から見ても分かるくらいに突進系のスキルを放とうとしている様に見える。構えだけのブラフという可能性もあるけど、ここまで実力差がありそうな相手に対して、そんな小細工をするようには考えられない。

……あ、もしかしてユウさん……？

と、私がユウさんの意図に気がつきかけた瞬間……

【DUEL！】

と、鮮やかなエフェクトと共にカウントダウン表示が消滅した。それ即ち……デュエル開始の合図！

「ヒヤッハアアアア！！！！ 死ねやぁコラアアアアア！！！！」

予想通り、というか分かっていたことだけど、やっぱりブラウンシュヴァイクさんは片手剣のスキルである、突進系の技を放ってきた。突進系スキルということは、【ソニックリープ】だろうか？

片手剣スキルは全く上げていない私には、詳細を読み取ることとはできない。

敏捷度パラメータの高さから来ているのであろうか、ブラウンシュヴァイクさんのスピードはかなりのもの。

普段の冷静そうな様子からは考えられない様な、粗暴な口調と共に装飾過多な片手剣を以て、及び腰なユウさんに斬りかかって来た。

「……………あは♪」

え……………？

この状況で……………笑って……………？ さっきまでの腰が引けた状態から……………やっぱり、ユウさんは……………この状況を作り出そうとして……………。

「ほれ、足元注意だ」

「うお！？」

ユウさんは、突進してきたブラウンシュヴァイクさんの攻撃を紙一重で躲して……………更にそこから、がら空きになった足に自分の足を引っ掛けて、体制を崩す。

スキルと出すためと慢心によって、ブラウンシュヴァイクさんの体はかなりの速度が乗っていたようで、少しバランスを崩したただけで、彼の体はアッサリと宙に浮く。

そこから、ユウさんは手に持っていた薄紫色の剣で……………。

「チャ……………シュ……………メン……………！」

「ぐあっ……………！」

単発水平斬撃技【ホリゾンタル】

片手剣スキルとしては、初歩的な技に当たる技だったと思うけど、完全にノーガードなブラウンシュヴァイクさんの横っ面にその攻撃がヒットすると、彼のHPは瞬く間に半分削り取られてしまった。

ブラウンシュヴァイクさんは、受け身も取れずに地面に叩き付けられ、周囲の人も本人も何が起こったのかと唖然とした表情でそれを見ていた。

対して、ユウさんは剣を肩にトントンとしながら担ぎ、地面に倒れ付したブラウンシュヴァイクさんにゆっくりと近づく。

ああ、やっぱりだ。

ユウさんの逃げ腰な剣の構えも、少しビビったような態度も……全部演技だったんだ。ブラウンシュヴァイクさんの油断を誘うための、さっきの一連の動きを見ただけでも、ユウさんのレベルはブラウンシュヴァイクさんよりも、私よりも遥かに高いはずなのに……。

なんでわざわざそんな事を……？ 分かんないから、あとで聞いてみよ。

「て、てめえ……猫被って……やがったな……？」

「おやおやおやあ……？ 自分の雑魚っぷりを人の所為にするのはやめてほしいなあ。買い被ってもらっちゃ困るよ、俺基本的に超ビビりだから。自慢じゃないが、テレビで幽霊特番とか見た夜は、怖くてトイレ行けなくなっちゃうほどの超ビビりだ」

もの凄く爽やかな笑顔を浮かべるユウさんは、得体のしれない彼の強さにたじろいでしまっているブラウンシュヴァイクさんを追い詰めるように、一步、また一步と近づいていく。

というか、今気がついたのだけどデュエル決着の表示がどこにも出ていない。

見てみると、ブラウンシュヴァイクさんのHPは半分とまだ少し残っている、さっきの攻撃も、強攻撃とは判定されなかったようで、デュエルはまだ終わっていないということだ。

もしかして、これも計算ずくだったのかな……？

「さあ〜で、さてさて……残りのHP、どうやって削っちゃおうかなあ……？ もうどこかに剣が掠っただけでも、あんたのHPが半分切っちゃうだろうし……よく考えて攻撃しないとね？」

「く……クソガア……!!」

ガキーン!!

そんな音と立てて、ブラウンシュヴァイクさんが意表を付いたつもりで振るった剣を、ユウさんは余裕を持って剣で受け止めていた。もうこれは……勝負にすらなっていない。圧倒的過ぎる。

「ひ……ひい……」

「ねえねえ？ 今どんな気持ち？ 雑魚扱いした奴にコテンパンに

伸されて、今どんな気持ち?？」

しかも、ユウさん………かなりのサディスト。

うん、ドSみたい。なんかもう、顔がものすごく生き生きしてるもん。明らかに楽しんでるもん……。

「かか、勘弁してくれ……!! 俺が…俺が悪かった…!!」

「どーしよっかなあ……」

「っ! てめえ! 俺様がここまで頭下げて」

「あゝ、ヤバイ。剣が、剣が金髪野郎目掛けて飛んで行きそう。オーバースローで投げつける三秒前な感じ……!!」

「ひい……!!! ほんと、許してくれ!! 何でも言うこと聞くらよお!!!」

HPが半分減った時点で、デュエルは終わり。システム上、デュエルが終われば街内でのHP保護が復活するから、基本的に命に関わることはないわけだけど……。

やっぱり、SAOが見せる世界は、分かっているてもそう単純なものではないみたい。人の持つ、根源的な死への恐怖が、こういう場面では顕著になってくる。

ブラウンシュヴァイクさんは、確かにレベル60近い、中層では名の知れたプレイヤー。

でも、そのレベルになるまでは恐らく中層で無理をすることなく、安全マージンを多めにとった上でのレベル上げをしてきたんだろう。それこそ、この世界での暇つぶしに。

その気があるのなら、とうの昔に攻略組に転向していてもおかしくないはずなのに、この人はそれをしなかった。

それはつまり……中層という、限られたエリア・レイヤー内での、ある程度の高い地位に立っていたいだけなんだと、そう思われても仕方がない。

彼のレベルの高さの手前、そんな事は今まで誰も口にしなかったし、しようとしなかったけど。

けど今は、ユウさんが言葉ではなく行動で、ブラウンシュヴァイクさんの根底にあるものを指摘した。

それも、こんなに多くの面前で。ある意味、社会的死とでも言えば言い過ぎだけど、これで彼に対する周囲の態度が変わることは間違いない。

ブラウンシュヴァイクさんの日頃からの素行の悪さは、中層プレイヤーならば彼のレベルが高いという事実と、それと同じく既知のことだ。

力は強いが、普段の素行が悪いものに対して、人は普段強く出ることはできないし、長いものには巻かれる的な考え方をするのがほとんどであり、定石だ。

でも、いざその者の力が弱まると、大衆は手の平を返したように『元』強者を嘲り笑う。

人の作り出すありとあらゆるコミュニティの中では、よく見かける光景だと思う。

「なら、もう二度とシリぽんに近寄るな、困らせるな、勧誘するな、色目を使うな。あとついでにリア充爆発しろ」

「ユウさん、もしかしてそれ言いたかっただけなんじゃ……?」

シリぽん言うのが、私のスタンダードなあだ名になりそうな事实は一先ず置いておいて……。

ユウさんは地面である意味、何の意味もない命乞いをするブラウンシュヴァイクさんに、そう告げる。金貨^{コル}を要求するわけでもなく、武器を取り上げるわけでもない。

ただ、私の迷惑になる行為をやめろと、そう命令した。

正直……ホッとしたし、嬉しいと思ってしまった。

それだけに、最後のワンフレーズが残念すぎる気がするけど……。

「シリぽんよ……昔々、とある偉い人はこう言いました……『リア充は死ぬ』と!!」

「一体どこの偉人ですかそれ!!?」

「伝説の魔法使いさん（分かる人には分かる方）だよ」

なんて言うのかな…ユウさんって、決めるところはしっかり決める人だけど……変なところで残念な気がする。

もっとクールな路線を狙っていけば、かなりモテるんじゃない??

あ、駄目だ。

クールなユウさんをイメージしたら、自然と笑えてきちゃって……。

「わ、分かったよ!!　そいつには近づかねえ!!　それでいいだろ!!　降参だ!!」

「最初からそうやって降参してればいいのに……ま、いいか」

ブラウンシュヴァイクさんが降参を宣言した瞬間、ユウさんのデュエル勝利を示すホロウインドウが二人のちょうど中間辺りに出現し、勝負に決着が付いたことを示す。

瞬間、周囲のギャラリーのプレイヤーさんたちから、『おおおおお おおお?!』と、驚きと小さな嘲笑を含む声が上がった。

多分、ブラウンシュヴァイクの日頃の素行の悪さを知っている人からすれば、『いい気味だ』という気分なのだろう。

「ちくしょう……!!　何笑ってやがる!!　クソどもが!!」

ブラウンシュヴァイクは、笑っている群衆に向かって強気な態度を見せるけど、その効果は殆ど無い。

程無くして彼は、人混みをかき分けてどこかへと消えて行ってしまった。

嫌な人ではあるけれど、やっぱりこういうシーンは見ていてもあまり面白いとは思えない。

それでも、無理矢理あの人のパーティに入れられるのは真っ平御免
だけど。

「んじゃ、一段落付いたところで、飯でも食いに行こうよ。この辺で
旨い店ってどこかなあ……？」

「あ、えっと……はい。街の南側に、結構食べ物おいしいって評
判の宿屋が在るらしいですけど……」

「よし、それじゃあそこ行こうか。イロイロ聞きたいこととかあり
そうだしさ」

一先ず一件落着、と言えるのかはさて置き。

ユウさんは何もなかったかのように、お気楽な様子で夕飯に誘って
くれる。気が付けば、周囲は薄暗闇に包まれ始めており、時間は既
に夜へと移行し始めていた。

ユウさんは私の表情から、心の中を見透かしたようにそう言うど、
私の手を取って集まったギャラリィの中をかき分けて進んでいく。

「はーい、見物はその辺にして散った散った。イケメンが通りま
すよーっと」

ユウさんの手から伝わってくる、アバターとしての擬似的な体温。
これも、S A O のシステムが感じさせる偽物の体温、感覚だと分か

つていたけれど……人の手の暖かさというものを久し振りに感じた
ような……そんな気がした。

あとユウさん……確かにイケメンなのは認めますけど、自分で言う
のはどうかと思います……。

そうして、私達二人は今日の宿と、食事を求めて街の中を歩き始め
た。

ep4 Duel (後書き)

という訳で、噛ませ犬もいいところなやつでしたw w

三下っぷりが伝わっていればいいんですが……。あ、ブラなんとかはまた登場予定です。

まあ、言わずもがな敵キャラなんですけどw

次回 ep5 Question

今回は、シリぽんとユウさんのディナータイムを、ユウ視点でお届けいたしますw どうぞお楽しみに〜ノシ

e p 5 Question (前書き)

うーん……話の進むスピードがものすごくスローペースです。

じっくり話を進めていきたいっていうのもあるんですけど、ユウの変態思考を文章にすると、それだけ話が長くなってしまう（；

・、ム・ゝ）

多分、20話以上の長さになると思われますが、お付き合い下されば幸いです。

アインクラッド編が終わってからは………どうしようかなと思っ
ていたりw

e p 5 Question

【ユウ視点】

「で、どういうことなんですか?？」

「ほへ?」

夕食兼今日の宿として世話になる宿屋の食堂……食堂と言ってもお洒落な雰囲気醸し出した、かなりセンスのいいところだが。

そのお洒落食堂の一角にて、スープや魚料理などが並んだテーブルを挟んで、俺とシリぽんは夕食を取っていたわけなんだが……。食事を始めるやいなや、シリぽんは我慢するのを堪え切れなくなつたような風に、俺にそう詰め寄ってきた。

うん、可愛い顔だ。リアルでもこんなに可愛い子は滅多に居ない。ぶっちゃけて言おう、嫁になってください。

「その……さっきデュエルのこととか……ユウさんの強さみたいなこととか……イロイロ……もう訳がわからなくて……」

「……ああ、そゆこと。てっきり、なんで俺がここまでイケメンなのかに対する理由を尋ねてきたものかと」

「あ、それはどうでもいいです」

「あふん（・ω・）」

面と向かってそう言われると、流石の俺もブローケンハートしてしまいそうになるが、シリぽんの可愛さを活力として何とか踏みとどまった。

まあ、聞かれるだろうなあとは思っていたし、この夕食の場で元々説明するつもりだったので、言い出すタイミングを図る必要がなくなったと思えばいい。

さてさて、どこから説明したものやら。

「オーケーオーケー。んじゃ、今からは質問タイムだ。俺はシリぽんからの質問に可能な限り答える、それでいい？」

「あ……その………はい………」

「なんでも聞いちゃってくれ。スリーサイズからお風呂で体のどこを一番に洗うのか、黒のストッキングを破く派か破かない派か、好きなコスプレの種類。あ、ちなみに最近のマイブームはテニスウェアだな。アンスコもそうだけど、あのスカートから見える生足がなんとも言えないエロさを…」

「質問するタイミングが掴みにくいですよ!？」

むう、ここから約五時間にわたって、俺のコスへの拘りについて熱く語ろうと思ったんだが……。やっぱり、女の子には男のロマンは

通じにくいか……。

駄菓子菓子、シリぼんがコスプレするならどんな格好だろうか……？
パツと見、小っちゃいけど、小顔のカワイイ系だ。脚も綺麗で、絶対領域まで完全構築してるところもポイントが高い。スカートとニーソの間に垣間見える、あの太ももは最早神の創造物とも言えるのか。

ふむ、ここは思い切ってミニスカポリスなんかどうだろうか……？

「ムフフ……君なら、逮捕されても構わんぜ☆」

「なら、黒鉄宮に叩きこんであげましょうか？」

「…初めてなの……優しくしてね？」

「……………」

「あー！！ 分かった分かった！！ 真面目に答えるから、答えるからその生ごみを見るような視線はやめて！！ ちよつと興奮するからー！！」

まったく、危うく俺の中でなにか新しい扉が開かれるところだったぜ。

まあ、イジメられる方もいじめる方も好きな俺にとっては、どっちもご褒美になるのだがね、フフフ。

おっとつと、またバカな妄想してたらシリぼんに今度こそ本気で黒鉄宮にぶち込まれそうだし、ここは真面目にお話ししておきましょう

うかね。

「えっと……まず、ユウさんは一体何者なんですか……？」

「ただの通りすがりのイケメンだが何か？」

「殴りますよ？♪」

「はい、ただのしがないソロプレイヤーでござーますです、はい。
へへへ」

こ、怖かった。今のシリぽん、間違いなく本気だった。眼のハイライト消えてたもん……女って怖い生き物なのね。
危うく、ちびりそうになっちまったぜ……。

と、取り敢えず簡単にSAOのプレイヤーカテゴリの一つである、【ソロプレイヤー】だということは明かしたわけだが……。
シリぽんは、その答えを聞いて少し納得したような様子だ。多分、彼女も薄々そんな気がしていたんだろう。

「なるほど……でも、ソロプレイヤーならあの強さも納得できるよ
うな……。でも、ブラウンシュバイクさんは60近いレベルなの
に……あそこまで一方的に……」

「当たり前じゃん。俺の今のレベル、80台なんだから」

「へえ……80台なんですか……通りで………っ

て80!!?」

俺が大体のレベルのことを口にすると、シリぼんはやっぱり驚いた。うーん、このリアクション、可愛いし癖になるかも。

でもまあ、実際レベルの高さが全てのこのゲームだ。さっきの全人類の敵であるリア充野郎が60近くのレベルだろうと、特に問題ではない。

「ま、20以上も開きのある相手なんだし、アレくらい出来なきゃ嘘だろ? それにあいつ、俺の作戦通りに動いてくれたしな。油断と隙の塊だよ。敢えて言おう!! 『カス』であると!!!」

「そのモノマネが誰なのかはこの際置いて……。そんなレベルの大差があるなら、なんで相手を油断させるための作戦が必要だったんですか? わざと弱いフリまでして……………」

ほお、シリぼん気がついてたか。

これは、あのバカよか、この子のほうがよっぽどゲームプレイヤーとしては立派だな。

洞察力がなくちゃ、このゲームでは長生きできない。

その点、シリぼんはよく人の行動を観察できている。

「弱いフリして油断を誘ったのは、スキルを見せなくなかったから。見たろ? 俺の出した技」

「『ホリゾンタル』……でしたっけ？ 片手剣の初期技ですよね？」

「そ、ああいう技で傷めつけてれば、俺のレベルだとかスキルの成長度は周囲にはあんまし割れない。自分のステータスを知られるのはこのゲームじゃよろしくないからな。どこで誰が見て聞いているのか分かったもんじゃない」

これは、俺の経験だ。

つい三ヶ月前だろうか？ とある階層でデュエルがあった。お互いにそれなりのレベルでスキル構成もバッチリの状態でデュエルをおっぱじめやがった。

原因は、パーティプレイによくありがちな、報酬、ドロップアイテムの配分を巡る言い争うだったそうだ。

結果は、わずかにレベルの高い方のやつ勝ち。負けた方は煮え湯を飲まされたような顔だったのをよく覚えている。まあ、デュエルで白黒付いたんだから、報酬の分け方もどうにでもなるだろう。

けど、話はそれで終わらなかったわけだ。

その言い争いの末にデュエルをしかけていたプレイヤー二人が、三日後、殺人ギルトであろう一団によって殺されたらしい。そのパーティは身ぐるみを全部はがされた、まあ強盗殺人だ。

パーティを組んでいた奴らの何人かは逃げてこられたらしいが、デュエルをした二人は真っ先に殺されたらしい。

理由は簡単だ、強盗殺人の主犯である殺人^{レッド}プレイヤーの連中は、二人のデュエルを観戦し、そいつらのレベルや実力を把握し、『カモ』

あるいは『ターゲット』に選んだのだろう。

情報というアドバンテージをすべて奪われた上で、こちらのカードに対する対策もバッチリでは、手の打ちようがない。

往来でデュエルをするのは、まあパフォーマンスとしては面白い。だけど、それと同時に大多数の人間に自分の強さの上限、弱点、対策するための要素を与えてしまう。

まあもちろん、圧倒的な力を見せつけることで、周囲を牽制出来るという事も考えられるが、アニメやゲームなどと違って、一人がどんなに強かろうと、数の暴力には抗うことはできない。

「レベルや狡賢さ、金を持ってるかどうか。それもこのゲームの重要なファクターの内だけど、情報も同じくらい価値有るものってことさ。俺だって、集団で掛かってこれれば殺される可能性だってゼロじゃない」

「なる……ほど………」

俺の話した昔話を聞き、シリぼんは少し表情を強ばらせてしまう。でも、彼女だってこのSAOのゲームのルールを知らないわけではないだろう。HPがゼロになれば死ぬのだ。

実際に死んでいるかもしれない例を聞かされれば、笑顔で居られるはずはない。

でもまあ……やっぱり女の子には笑っていて欲しいので、ここは少し軽く冗談でお茶を濁しておきますか……。

「それにさ、情報云々のことを差っ引いても……………」

「……………？ 差っ引いても？」

「ああやって、公衆の面前で油断しまくった相手フルボッコにする方が……………普通にデュエルするよか面白いじゃん」

「……………ユウさんのドS……………」

むむ、何故か俺がドS判定されてしまった……………。失礼な、俺ほどニュートラルな存在はこの世にないかもしれないのに……………。

まあ、さっきの少し怖いような表情を壊せただけ、良しとするか……………。やっぱり、可愛い子は悲しい顔をさせておくと勿体ないからな。

「あ、そう言えば。ユウさんが使ってたあの剣、見た目は全然普通の剣なのに、もの凄くいいものみたいですね？ なんて言うのかな……………？ 刀身がものすごくつていうか、怖いくらいに綺麗で……………どこの鍛冶職人さんの作品なんですか？」

「ああ、これ？ この剣、普通にモンスタードロップ品なんだよ。あんまり、職人様が宝はいい顔されないんだけど、性能的には申し分ないしな。ほい、持ってみる？」

「あ、ありがとうございます……………すう！！？！？」

と、俺の剣に興味があったようなシリぽんに、別に減るもんでもないの
で腰に下げていた俺の相棒を渡してみる。

うーん、出来ればこっちの剣ではなく、俺の股間の大剣に興味津々
になって……おっと、これ以上はセクハラになりそうなのでやめて
おこう。

話を戻して、俺の剣を受け取ったシリぽんは、どうやらかなり剣の
筋力要求値が高かったらしく、一瞬テーブルに突っ込んでしまいそ
うになる。

あ、いけないいけない。普段から全然気にもしてなかったけど、シ
リぽんと俺じゃ筋力パラメータが違うんだった……。要求筋力値
のこと、言うの完全に忘れてたよ……

「何この剣……!! 重っ!!?」

「ああ、ごめんごめん……その剣、結構重いから気をつけて」

「いえ、もう少し早く言ってもらえていたら嬉しかったんですけど
……。ええと……。剣の名前は……。ニーズヘッグ……。ですか

……」

剣の表面をシリぽんが指先で叩くと、ネームウィンドウが表示され、
俺の相棒である『嘲笑する虐殺者ニーズヘッグ』というモンスタードロップの魔剣
のような性能を秘めた剣の名前が顕になる。

シリぽんは、やはりその剣の名前のおどろおどろしさに一瞬身構え

てしまう。

まあ、無理もない。というか、ゲットした時に俺も名前の欄を見て苦笑してしまったほどのだから。

なんというか、悪役が持っていそうな名前の剣だったので、使っているもののなか悩んでしまいそうになったほどだ。

「確か……69層あたりのやつからドロップしたんだ。狙ってたわけじゃなくて、ただ単にダンジョンの中を進んでた時に出てきたやつをボコッただけだね。そんな時にポロンと」

「へえ……でも、こんな剣を持って、それもソロプレイヤーって言うことは……ユウさんって、もしかしくなくても……」

「うん、一応攻略組。とは言っても、ボス戦に毎回参加してるわけじゃないんだけどね」

「え？　そうなんですか？」

シリぽんが返してきた剣を受け取りながら、彼女の質問に答える。シリぽんも、ソロプレイヤーであることと、剣の質、圧倒的なレベルから、俺が攻略組であることをある程度は予想していたようだ。ホント、説明の手間が少なくて済む子だ。

「ボス戦に参加するときはするけど、気分が乗らなかったり、他にやりたいことがあった時は、そっちを優先してるかなあ……。ちゅーか、あんまし集団戦って得意じゃないし」

「へえ……ボス戦に参加したことすらない私が言う資格ないと思いますけど、結構ユウさんってフリーダムな感じなんですね？」

「あはは♪ フリーダムな感じ、なかなかいい響きじゃない。……
……まあ、ぶっちゃけて言えば、好き嫌いの問題なんだけどね」

「好き嫌い……ですか？」

シリぽんが、キョトンと小首を傾げて、若干低い視線から？マークを俺に向かってくる。

ああもう！！ その仕草反則！！ シリぽん、可愛いよシリぽん！！

もう、このままお持ち帰りしたいくらいだけど、俺は紳士だからそんな事はしない。どうせやるなら、しっかりフラグを立てて、然るべき手順を踏んだ上でのエッチイベントこそに真のエロ、漢道の極意があるわけで。

おっと、イカンイカン。これ以上は、週プレの袋とじを正規を使って華麗に開けるようになってからのお話だ。
ここは、真面目にシリぽんの話に答えていこう。

「んゝとな、俺ってさ、ぶっちゃけるけど、一部を除いてだけど、ギルドって存在が大っキライなんだよね。だから、ボス戦で集まるギルトの連中とつるんで戦うってのが心底嫌なわけよ」

「ギルドが嫌い………ですか………。でも、それなら最初からボス戦に参加なんかしなければ……」

「なんだろうけどね……。頼まれたら断れないっていうか、ほら俺って女性からのお誘いにはホイホイついで行っちゃうから」

「ああ……。なるほど把握しました」

ここまでアツサリ納得されてしまうと、ちょっと傷つく……。

まあ、本当のところは、ただの暇つぶしと……。自己満足かなあ……。……。

あの時……。何も出来なかったから、せめて今だけは……。……うわ、なにこれ？

こんなシリアスなの俺じゃないな、うん。

俺は通りすがりのイケメン剣士、皆のアイドル（願望）ユウさんだ。うん、この路線を忘れないようにしなければ……。そんでもって、いずれはリア充の仲間入りを……。でへへ。

「あの、なんでギルドが嫌いなんですか……？」

「……。……それを聞きたいなら、続きは俺の部屋のベッドの中でじっくり教えてあげよう。朝まで掛かると思うけど大丈夫、この俺の全身から迸るいい男オーラの前では初めての緊張なんか些細なことでd……」

「あ、じゃあいいです」

「あふん（・ω・）」

うう、シリぽんが冷たい……。俺、構ってくれないと死んじゃうよ？
ホントだよ？

うわ、なんだか自分で自分の行動を客観的に見てみると、死ぬほどウザいな…………。

でも、シリぽんから飛んでくる、冷たい視線が少し心地良かったり…………。うへへ、だから止められいのさ、このキャラは！！

さあさあ！！ シリぽん！！ もっと俺のことを罵り、ゴミを見るような視線を向けてくるがいいさ！！ 俺の器は、それをすべて受け止めてみせよう！！

俺は人間をやめるぞ！！！！ ジョ○ヨーーーーー！！！！

「えっと…………聞きたいことは…取り敢えずこの辺りでいいです。そろそろ夜も遅いですし」

「そう？ まあ、シリぽんがいいならいいけどさ。まあ、適宜聞いてくればいいさ。初体験はいつだったとか、今まで何人彼女がいたのとか、スカートは外す派か付けたまま派かとか」

「え？ ユウさんって…………もしかして『経験』とか…………あるんですか？ それに彼女も…」

「うわああああああん！！！！ したことないよ、畜生おおおお！！！ 彼女も出来たことないし、スカートは着たままのほうが好きだよ！！！！ はい、どう考えても童貞です、本当にありがとうございます……」

かなり強烈なブーメランフックになってしまった……。顔真っ赤にしてあたふたするシリぽんを見てみたかったのに、まさかあんなに鋭い返しを放ってくるとは……。シリぽん、恐ろしい子！！

いや、今のはまじで精神的に大きなダメージを被っちゃった……。ああ、俺がDTを捨てる日はいつになるんだろうか……。と、16歳の俺は言ってみる。

うん、まだ早い！！　そういうのはまだ俺に早いんだよ！！　そう考えよう、うん！！

あれ？　猛烈に死にたくなってきた。

「それで、明日からはどうするんですか？　いきなり、目的の階層まで行くんですか？」

「俺なんか……。俺なんか……。……え？　ああ明日のことね……。うーん……。リーブルの糸は密林の中って言ってたけど……。41層の密林ダンジョンってどこのやつは分からんし……。うん、まづは情報収集だな」

俺の複雑骨折しそうなった男の尊厳だったけど、シリポンの癒しボイスでなんとか立ち直ることが出来た。

そうだな、今は俺の童貞のことは一先ず置いておこう。その内、可愛い子がベッドの上でスカートをたくし上げて、それを口で加えながら、恥ずかしそうに脚をM字に開いて……

ってそうじゃないっての。

明日の話だ明日の！！　とは言え、情報収集となると……。そうだな、オヤジさんのところに厄介になるとするか……。

「よっしゃ。んじゃ明日は、情報収集ってことで俺が懇意にしてる情報屋のどこに行こう。そこで41層内にある密林の情報とか、出現モンスターのこと、後はシリぽんのスリーサイズと好きな下着の種類なんかを聞くとしよう」

「最後の完全に関係ないですよね！！？　ていうか、そんなの教えませんから！！」

「ああん、シリぽんの　イ・ケ・ズウ☆」

「本気で、黒鉄宮にぶち込みますよ？？」

「すみません」

クソウ……かわいいキャラで攻めたつもりだったのに……効果なしっすか…。

ていうか、今のシリぽん、超怖いです。先輩マジパネエっす。

ということで、俺たちは明日の予定を立て、NPCが出してくれた夕食に本格的にありつくことにした。

さてさて、明日からはどんな感じになるのやら……。しばらくは退屈しなくて済みそうかもね。

その後、夕食を食べ終えた後、シリバンに『俺のベッドの横はいつでも特等席だぜ☆』って言ったら、『じゃあ、今夜は空席のままですな☆』ってめっちゃくちや気持ちのいい笑顔と一緒に返された。

ちよつと涙出た。

うん、私泣かない、へこたれへん。
男の子だもん、ぐすん…………。

ep5 Question (後書き)

ユウの変態度がとどまるところを知らないです……。ほんと、どうしてこうなった……。

と、ユウのイメージCVって誰だと思います？ 皆様のご意見などいただければ嬉しいですw

シリぽんは……後藤麻衣さんですかね。

ハガレンのメイ役だったり、efの羽山ミズキ役だったり……

妹系美少女の声がよく似合う声優さんですね。

安玖深音さんと声が似てるけど、気にしない気にしない。(分かる人には分かるネタ)

次回 ep6 Guild

e p 6 G u i l d (前書き)

ソードアート・オンライン、アニメ化!!

キマシタワ、(。▽。) ノエヘヘヘ、

この小説を購読するようになって、早三年……待ちに待ったという
感じですね w

声優さんのキャスティングなども気になりますが、今は続報を待つ
ことにします w

e p 6 Guild

【シリカview】

浮遊城塞・アインクラッド、第50層。ごみごみとしたというか、建物が一杯と言うか……人も多ければ、建造物も多いこの都市、名前は【アルゲード】。

普通に歩いているだけでも、慣れるまでに目を回してしまいそうになってしまうこの街の中……。

あまり頻繁に来ることのないこの都市。50層というと、私のレベルでも少し危うい程度のレベルなので、街に来ることはあっても、その外から出ることはまず考えられないような階層だ。

「ほれほれ、シリぽんや？ 人の波に流されてばかりじゃ、世の中の競争、社会と言う名のヒエラルキーの中でより高みを目指すことなどできんぞ…？ そう、時に人を蹴落とし、希望を摘み取り、可能性を目の前で叩き潰して絶望させる……そんな非情な手段を講じなければ道を切り開けないことが、この長い人生の中で見えてくるもので……」

「話が長い上に、なんでそんなブラックな内容を清々しい笑顔でするんですか…。ていうか、ユウさんこの人ごみの中をよくそんなにスルスルと……」

「ふふ……イケメン紳士たるもの、これくらい出来なくてどうしま

す…（一、ム…）キリッ」

そんな階層の中の主街区の中を、私とユウさんは歩いていた。というか、ユウさん……私と話しながらも、スイスイと人ごみの中を歩いていけるんだ……イケメン紳士かどうかは疑問だけど、純粹に凄いとは思った。

「あ……とと!!」

でもやっぱり、この街にあまり慣れていない私にとっては、この人ごみはある意味脅威だ。都会の大きな電車の駅、その朝のラッシュの中にいるような気すらしてくる。

思えば、その電車の朝ラッシュすら、今の私達には懐かしいものなのかもしれない。

少なくともこの世界には、スーツ姿で仕事、冒険に出る人はいないだろうから。

「やれやれ……。ほら、俺の手、掴んでな」

「ふえ？……い、いいんですか？」

「いいも何も、はぐれたりしたら大変だろ？ あ、手じゃ満足できないって言うなら、俺の股間のロングソードを……」

「あ、手でお願ひします」

「あふん」

もう……ユウさんって隙さえあればセクハラばかり……。リアルなら、それだけで訴えられるかもしれないですよ……。？まあ、あんまり本気で言っていないみたいだし、冗談なんだろうけど……。

「キュル、キュル」

「え？ お前如きの股間の『あれ』がロングソードなわけねーだろWW 精々がダガーだったのって？ ピナ先輩WW 俺の心がストレスでマツハなんですけどWWWW」

「またナチュラルにピナとお話してるし……。というか、ピナもピナで、朝からユウさんの頭の上に乗っかってる……。むう」

正直、ティマーは私なんだから、私の頭の上に乗っててくれればいいのに……。

それに、ピナ……なんだかユウさんの頭の上でご機嫌だし……。ちょっとムカつく……。

べ、別に私もユウさんの頭に乗りたいとか（まず無理だけど）そういうのじゃないけど、私がティマーなのに……。ぐぬぬ……。

そんな私の心の葛藤はともかくとして、私とユウさんはその……手

を繋いだ状態でアルゲードの複雑な作りの街の中を歩いて行く。
ユウさんは、私のことを案じてくれているのか、歩くスピードをゆっくりにしながらか最も歩きやすいコースを選んでくれているみたいで、私がつんのめりそうになることはなかった。

こういうところは、素直に紳士的だと思う。

「さてと、これから俺の行きつけの宿屋でシッポリと……」

「ユウさん、叩きますよ」

「はーい、情報屋のところまで後数メートルでございませう」

もう……。こういうセクハラさえなかったらもっとカッコイイのに……。世の中には『残念なイケメン』という人種がいるらしいのだけど、間違いなくユウさんはその人種に入るのだろう。

とか何とか、そんな事を考えながら歩くこと数十秒後……私達二人の前に、一軒……といていいのか、ものすごく大きな建物の姿が見えてきた。

アルゲードの繁雑とした雰囲気には溶けこむような、怪しさを醸しだしつつ、その大きさだけは異質。一般的な中学校や高校の建物の一棟くらいの大きさだろうか？

見れば、入り口らしき門の付近には武装したプレイヤー……恐らくは門番のような役割を帯びている人たちが立っていた。しかも、ものすごく強面な感じの……。

「ユウさん……ここが、そうなんですか…？　ものすごく大きな建物ですけど」

「そりゃ大きいさ。ここ、ギルドホームだもん」

「あれ？　ユウさんって、ギルドは大っキライなんじゃ………？」

機能の夕食の時に、ユウさんの口から聞いたことだ。『ギルドが嫌いだ』と……。

だが、今まさに入ろうとしている建物はギルドの本部でもある所…
…一体どういうつもりなんだろうか………？

「ギルドは確かに大嫌いなさ。でも言ったら？　一部を除いてって」

「………あ、そう言えば………って言うことは、今日お世話になるのは……」

「そそ。その一部に入ってるギルド。【朧月夜】って名前で………まあ、門番のあんちゃん達見ればわかるけど、ちよいと怖い感じのことだ。実際は、気さくで義理堅い人達なんだがな」

「へ、へえ………」

そ、そんな怖いけど、気さくで義理堅い人達のギルドに臆面も無く入っていいこうしてるユウさんって一体……。
もしかして私、とんでもないところに来ちゃったのかな………？　てい

うか、こういう所って事前にアポイントメントとか取ってないとダメとかじゃないのかな……？

と、そんな私の心配を他所に、ユウさんは気楽な足取りで、強面な感じの門番さん達が守っている建物の入口に近づいていく。

私も、慌てて後を追うけど、ユウさんの後ろに隠れ気味なポジションだ。

だ、大丈夫かな……？ いきなりイチャモンとか付けられたりしない……よね……？

けど、そんな私の心配は、意外なほどアツサリと杞憂となってしまうことを、この数秒後に私は実感することになった。

「こ、これはこれは！！ 兄貴、お勤めご苦労さんっス……！！」

「兄貴……！ 今日はどんな御用件で？」

「……………へ？」

門番の、ちょっと強面なお兄さんたち。多分、私やユウさんよりも年上の、大人と呼ぶに相応しい体躯を持った人達が、一斉にユウさんに向かってよくテレビのヤ○ザもので見るような、気合の入った礼をしながらそう言ってきた瞬間、私の頭は？マークで一杯になった。

え？ 兄貴？

ユウさんの方が年下なのに？ あ、でもこういう場合って、あんまり年齢的なものは関係なかったりするのかな？

うう、ますます訳がわからない状態に……………。

「あはは……………兄貴はやめてくださいよ、俺のほうが年は下なんですから」

「何をおっしゃいますか！ 兄貴は俺たち、朧月夜全員の命の恩人なんでさあ！！」

「そうですぜ！ あん時、兄貴がいなけりゃ、俺らは間違いなく死んでやった……………。そんな俺らが、ここまでギルドを大きく出来たのも兄貴のおかげです…」

「そんな命の恩人を、呼び捨てになんて出来やせん…！ 私らの仁義と誇りに賭けて、この御恩は返させていただきます！」

（ 。 ㄥ ） ポカーン ↑その時の私の顔

うん、というか他にどんな表情をしていたのか分からなかった。

話を聞くに、どうもこのギルドのメンバーの皆さんは、昔ユウさんに命を助けてもらって、それで恩を感じて敬ってる……………ってことみたいなんだけど……………。

「あれはたまたまですよ。それに、それ以来いろいろ情報回してもらったり、小遣い稼ぎまでさせてくれてるんですから、こっちがお

礼を言いたいくらいですよ」

「またまたご謙遜を……いやあしかし、やっぱり懐の大きいお方だあ………」

「ああ、頭がかしら気に入るのも当然ってもんですよ……！」

もうこれは、ユウさんが何を言っても無駄と言うか、その発言から更に尊敬の念が倍増する勢いっていうか……。でも、さっきユウさん、小遣い稼ぎって言ってたけど……。も、もしかしてなにか悪いことをしていたり……？

「ユウさん？ あの、小遣い稼ぎって………？」

「ん？ このギルドの人達が、情報集めやダンジョンの攻略マップを作る時に護衛の仕事を頼まれるんだよ。それで、結構な額の報酬をもらえるってわけ。ダンジョンの危険度にもよるけど、一回あたり……えくと50万くらいかなあ」

「い、50万!？」

わ、私が三十三層で受注したクエストの報酬の……40倍くらい………？

まあ、NPCからの依頼よりもプレイヤーからの依頼っていうか、頼みごとの方が報酬が多いっていうのは当たり前って言えばそうだけど。

けど、護衛ってことは、それ相応の危険もつきものなんだろうな…

…。それを考えれば、高額の報酬も当たり前なんだろう。

「情報とダンジョンの攻略マップ作成って言うことは、ここのギルドのメインの活動は」

「そうそう、情報収集とかマップ作成、攻略組から中層プレイヤーのサポートをメインにしているとこ」

「へえ……私、あんまり50層には来ないので、全然知りませんでした……」

「ここのギルドリーダーの人曰く、『うちはまだまだ成長中なんだ』ってことらしいからな。実際、かなり成長してるみたいだし」

うう、人を見た目で判断しちゃいけないって、それくらいは分かってたのに…………。

ちよっと反省…………。

でも、こんなギルドがあるんだ……今度からお世話になってみようかな…………？

「て、兄貴？ そっちのお嬢さん、もしかしてビーストテイマーのシリカさんじゃないですか？」

「あ、ホントだ。兄貴の頭で寝てる『フェザーリドラ』、確かに…………」

「あ、やっぱり皆さん、シリボンの事知ってたんですね」

「いや、だからシリカですってば……うう、もういいですよ……」

と、流石は情報を扱っているギルドの人達と言ったところで、私のことはよく知られているみたいだった。

もともと、中層では珍しいビーストテイマーのプレイヤーということで、そこそこの有名になってしまっていたので、もしかすると、とは思ってはいたけれど。

それに、ピナの種族名まで把握済み。やっぱり、その道のプロの方たちなんだなあと、素直にすごいと思ってしまうたり。

ユウさんが、私の名前を一向にちゃんと呼んでくれないのは、もう諦めようかとも同時に考えていたけれど。

「流石は兄貴……中層では有名な、それも超可愛い女の子プレイヤーを嫁にされるなんて……」

「羨ましい……ですが、兄貴なら仕方ないっすね……末永くお幸せに……!!」

「はっはっは!! あ、やっぱりそう見えちゃいます? デヘヘW 昨日の夜も、俺のベッドに寂しいから潜り込んでしまいまして、そこから朝まで目くるめく時間をですね?」

「何言ってるんですかもう!! 私達、まだそんな関係じゃないですよ!!」

ユウさんのセクハラにも、ちょっとだけ慣れてきてしまっていた私自身が少し憎い。

うう……こういうところさえ無かったら、ユウさんって本当の意味でイケメンになれると思うんだけど……。

そ、それに私は……結婚なんてまだ考えてないし……まだ早いし……。

「まだってことは、これから先、その可能性がなきにしもあらずって感じ……？ うほww興奮してきたww」

「なっ！！　ち、違いますよ？　あれはその、言葉の綾ってもので……！！　ていうか、その『興奮してきたww』ってやめてくださいよ！！」

「分かった分かった。家は庭付き一戸建ての5LDKで、子供は二人で……」

「もう！！　ユウさん！！？」

私とユウさんのそんなやり取りを見て、朧月夜のメンバーの人達は『あっはっは！！』と、面白いものを見せてもらったと言わんばかりに、気持ちのいい笑いを浮かべる。

うう……ユウさん、この状況を絶対楽しんでるよお……。

私も、変な言い方したのはまずかったけど……で、でも、一瞬だけ、ユウさんとの結婚を考えてしまいかけた私は、もう末期なのか

もしれない。

『シリカ、あなた疲れてるのよ…』というような声が、どこかから聞こえてきそうだった。

「あはは…さてさて、可愛いシリぽんを虐めるのはこれくらいにして………」

「うう……ユウさんのイジメっ子………」

私のユウさんを睨む視線に、『ごめんごめん』と謝りながら、ユウさんは今日ここに来た要件を進めることにしてみたいで、朧月夜のメンバーの皆さんに向き直って、話を再開した。

今日の目的は、四十一層にある密林系ダンジョンの情報だ。出来れば、ダンジョンの詳細なマップや、出現モンスターの種類や特性などを知っておきたい。

その情報を元に、今日は宿をとった上で、冒険の打ち合わせということになっている。

リーブルの糸を取りに行くのは、事実上明日ということだ。

「今、オヤジさんはいますか？　ちょっと、売って欲しい情報とかがあるんですけど」

「頭なら、今商談中です。あと15分くらいで終わると思いますから、少しの間お待ちいただければ………」

「申し訳ないです。兄貴が来ると分かったのなら、前もってスケジュールを開けておいたんですがねえ……………」

「いえいえ。こっちがアポ無し出来たわけですから、取り次いで頂けるだけありがたいです。それに、急ぎでも何でもないですし」

「うう、今気がついたことなんだけど、ユウさんって敬語使えたんだ……………」

フリーダムなイメージがあるから、年上に対しても傍若無人な感じかと思ってたんだけど……。実際、ブラウンシュヴァイクさんに対しては、超俺様な口調だったし……………」

やっぱり、根っこの部分はちゃんとした人なんだ……………。普段は変態だけど。

「では、応接室にご案内しやすいので、お二人ともこちらへ」

「はい、よろしくお願いします」

「お、お願いします！」

そして、メンバーの内の一人、恰幅の良い体に、背中に装備した大剣がよく似合う、重量級プレイヤーの人が、大きな木製のドアを開き、私達をギルドホーム内部に招き入れてくれた。

ユウさんは、慣れた様子でその後に続き、私も少し緊張しながらユウさんの後を追った。

さっき、ユウさんが言ってた『オヤジさん』……多分、朧月夜のギルドリーダーの人なんだろう。一体どんな人なんだろう……？

そんなことを考えながら、木目調の長い廊下をユウさんに隣立って歩く私だった。

【シリカ view end】

e p 6 Guild (後書き)

ユウさんも、一応常識人なことが分かった、第六話でしたww
彼も、普通の相手には普通に接するんですよ？（女性はその限りではない）

次回は、ギルドリーダーさんとのお話でございます。相変わらず話しの進む速度は亀ですが、楽しんでいただければ嬉しいですw

次回 e p 7 Negotiation

ep7 Negotiation (前書き)

今期の新作アニメが、続々と放送開始し始めましたね。
一話見ての取り敢えずの感想をば少しばかり……

ペルソナ4…ゲームプレイ済みなら思わずニヤリとしてしまう。ほ
っちゃーん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアーツ！！

ましろ色シンフォニー…紗凧ルートやってくれるならブルーレイ買
います。紗凧可愛い。

C3 シーキューブ…ゆかりん&みのりん 梓 ファイア可愛い。

灼眼のシャナ？…二期の内容が思い出せないでござす（・ω・）

僕は友達が少ない…肉が可愛い、肉が可愛い。伊藤かな恵さん最高
です。

ぬらりひよんの孫（前シーズンから繰り越し）…つらら可愛い、ほ
っちゃーん！ ほ、ほーっ、ホアアーツ！！ ホアーツ！！

ガンダムAGE…私にはユニコーンがあるので問題ないです。

e p 7 N e g o t i a t i o n

【ユウ視点】

「な、なんだか……物凄く高そうになっていうか……手が掛かってる感じの部屋ですよね……」

「実際高いだろうな。まあ、派手なものはないけど、趣重視の内装に拘ったって感じだな。オヤジさんらしいよ」

俺とシリぽんは、回るベッドやムーディな照明とBGM、スイッチをオンにすればスケベビデオが垂れ流しになっている部屋……ではなく、朧月夜のギルドホームの応接室のソファに腰を下ろし、ギルドの総責任者の商談が終わるのを待っていた。

応接室ということで、清潔感はもちろんのこと、嫌味のない、それでいて落ち着いた高級感のあるインテリアや家具などが据え付けられている。

このギルドのリーダーは、こういったインテリアにはかなり拘りがあるとかで、妥協という言葉を知らないらしい。

まあ、宝石ジャラジャラのド派手な物を置くようなセンスをしていないだけ、まだマシと言うか、ずっと好感が持てるセンスだ。

テーブルにも、明らかに良い品であろうカップに、リアルで言うところの緑茶によく似た飲み物が入れられており、温度の高さを主張するように湯気を出している。

実際、なんとという名前の飲み物なのかはわからないが、こういった懐かしい味を得ることはリアルへの帰還という願望をより強くさせるのかもしれない。

「あの……オヤジさんって、このギルドのリーダーさんなんですよ？　どんな方なんです？」

「どんな方って言う……うん、パツと見は^{かたぎ}氣質には見えないな。見てくれは怖いけど、話してみると意外と常識人且つユーモラスなおっさんだ。ダンディズムっていうの？　そういうのを体現してる感じ」

「へえ……。ちょ、ちょっと緊張しちゃいそうです……」

ソファの上で、少し体を小さくしてしまうシリぼん。

今日も、短いスカートとニーソの生み出す絶対領域が眩しいっす、マジパネエっす。

出されたお茶……のような飲み物をチビチビ飲む姿も、まるで小動物かのような愛らしさを醸し出し、俺の荒んだ心（実際荒んでいるかは置いておいて）に気持ちのいい潤いを与えてくれる。

シリぼんの質問にもあったことだが、ここのギルドのリーダー、通

称【オヤジさん】はさつき俺が説明した通りの人物だ。

というか、ギルドを嫌っている俺が、そういった感情を無視して、ギルド・朧月夜と懇意にしているのも、このオヤジさんの人柄というものが大きな理由だ。

仁義というか、義に熱く、仲間思い。部下たちに有無を言わせず、その背中に付いて行きたいと思わせるようなカリスマ。

何より、その大きな懐、器のデカさというものを備えている、まさに指導者、リーダーという役割を担うために生まれたような人だ。

攻略ギルドと情報商売ギルドということで、畑は違えど、最強ギルド血盟騎士団、K O B のリーダーであるヒースクリフ。

彼とも少し似たようなタイプかも知れないが、根っこの部分は全く違うように感じる。

尤も、俺はあまりK O B とは関わり合いたくない。何と言うか……
：真面目すぎると言うか、堅っ苦しい空気があって、俺の肌に合わない感じがするというだけのことなんだけど。制服とかを作って統一してるあたりとか特に。

あ、でも副団長さんは美人なので、嫌いじゃないです。

不真面目な俺は、たまにフラッとボス攻略に参加したりするから、その度に睨まれたり、怒られたりするけど。

まあ、彼女は想い人が居るみたいだから、非攻略対象なわけだけど。全く、リア充マジ爆発すればいいのに……

「そもそも、このギルドと関わることになったキツカケは、朧月夜が結成されてから半年くらいか……ダンジョンのマッピングでたまたま潜ってたところで、犯罪ギルドの連中に襲われてたところに、俺

が加勢したことなんだ」

「ああ、それでさっき、門番の人達がユウさんのことを『命の恩人』
って……」

「そゆこと。それで、助けてもらったお礼がしたいって、朧月夜のメンバーの人に案内されてギルドホーム、ああ、昔のギルドホームだからここよりもっと小さいとこだったけど、そこに案内されて、オヤジさん直々に礼をしてくれたってわけ。それで、それが縁でちよくちよく仕事頼まれたり、用心棒みたいな事してるんだよ」

用心棒、と言えば少しカッコイイかもしれないが、実際それくらいしか上手い言葉が見つからない。

ダンジョン探索の時の護衛や、たまに舞い込んでくるらしいトラブルの処理（大体が荒事）、依頼としてのアイテム探索など……

報酬がかなり良いのと、繰り返しになるがオヤジさんの人柄、ギルドの雰囲気がいいため、イロイロ手伝っているのだが、用心棒的ポジションというのが一番しつくり来るということだ。

「俺としては、用心棒じゃなく、正式なメンバーとしてウチに入って欲しいところなんだがな」

「！」

「あ、ども。お邪魔してます」

と、シリぽんとの話が一段落した瞬間、応接室のドアが開かれると同時に、芯の通った力強い声が室内に響いた。

シリぽんは、いきなりの声にビクついてしまったようだが、俺にしてみれば聞き慣れた声だ。いつも通りの挨拶しておく。

応接室に響いたこの声、その主は悠然とした様子で室内に入ってくる。

黒髪をビシツとしたスタイルに決め、服装は和風と言うか、着流し姿。

どう見ても気質には見えない厳つい顔だが、理知的な要素を含み、落ち着いた雰囲気さえ放っている。

「というか、俺がギルドには入らないっていうのは、何度も説明したでしょうに……。柄じゃねーんスよ」

「へっ……。まあ、うちの依頼を100%こなしてくれる用心棒ってことで我慢しとけてことかい」

「そんなところです」

この男こそ、ギルド【朧月夜】のリーダーである、『ギンロウ』。通称、オヤジさんだ

徐々にその力を伸ばしてきている、このギルドのブレインであり、象徴的な存在でもある。

俺が、このギルドだけは例外的に好意的に接することが出来る大きな理由の一つそのものだ。

「おっと、そっちの嬢ちゃんは……」

「俺のよm」

「しばらく、ユウさんとパーティを組むことになった、シリカって言います。よろしくお願いします」

「(・ω・)」

ヒドイ。いくら俺がダンディで男らしくて、イケメンで男気溢れるナイスガイだからって、そんなに照れて素直じゃない反応しなくてもいいのに……。

ホント、シリぽんは恥ずかしがり屋だなあ……そういうところも可愛いんだけど、やっぱりたまには素直になっ

「あ、ユウさん？ 私別に照れ隠しとかは考えてませんからね？ただ単に、今現在の私達の間を事実に基づいてお話したただけですから」

「思考を読まれている!!?」

ま、全くこのお茶目さんと来たら……来たら……うう、分かっている、分かっているわよ……所詮私達、体だけの関係ですものね……。

あなたはそうやって、いつも私を弄んでは捨てていく……そんな

あなたに惚れた私が馬鹿だったのよ……

「あの……変な妄想はその辺りにして、お話を前に進めませんか？」

「妄想すら許してもらえない!？」

「はぁ……相変わらず、騒がしいやつだなお前は……」

シリぱんのゴミくずをみるような視線（ちょっと興奮した）と、オヤジさんからの呆れたような視線。
その二つが俺のハートにクリティカルヒットし、危うく俺のガラスの心が粉々に砕け散るところだった。

ま、まあいいや……シリぱんの言う通り、おふざけも大概にして話を前に進めよう。

「で？ 今日はい体何のようだ？ ここに来るってことは、何かしらの情報を買ってえんだろがよ」

「はい、実はですね……」

そうして、俺はオヤジさんに今日ここに来た主な理由、41層の密林ダンジョンのことに關しての話をすることにする。

リーブルの糸という、まだ誰にも見つけられていないであろうアイテムの話も一緒に。

情報の独り占めというのも、このギルドに關しては後暗いことはな

しということで付き合っていきたいから包み隠さず話しておく。

それに、こういう話をバカ正直に持つてくることで、案外いい方向に話が進むこともあるというものだ。無論、相手を選ぶが。

「ていうことで、俺とシリぽんはその密林ダンジョンに自生してる植物っぽいものから取れるその糸を取りに行くわけです」

「リーブルの糸か……確かに、まだ俺も聞いたことのねえアイテムだな。恐らくは、まだ入手したプレイヤーがいないアイテムなんだろう」

「結構、そのフラグ立てが難しいっていうか、普通にやってたら気づかないレベルでしたからね」

俺とオヤジさんが話している間に、シリぽんが補足的にそう言葉を付け加えてくれる。

確かに、彼女の言うとおり、特定のクエストをクリアし、その帰り道で罠に引っかけ、その罠に使われた縄を入手したまま依頼アイテムを納品する……。

まどろっこしいと言うか、意地の悪いフラグだ。寧ろ、これをフラグと呼んでいいのかと迷ってしまった。

「なるほどな。で、お前らが欲しいのはそのダンジョンの詳細なマップやモンスター情報ってわけか」

「察しがよくて助かります。まあ、モンスターなんぞは俺が三〇無双状態でけち散らしてもいいんですけど、道に迷うのは面倒っスから。それに、たまにはノンビリとダンジョン探索するにも悪くないかと」

「はっはっは！ お前らしい考え方だ。他の攻略組は毎日最前線でダンジョン攻略に勤しんでるっていうのにな」

「俺には俺のペースがありますし、何も毎日攻略にばっか専念しないといけないって訳じゃないっすよ。たまには息抜きもしないとね、パンクするのは真っ平です」

別に、攻略組だからって、毎日毎日、年がら年中攻略のことばっか考えてダンジョンに潜らないといけないってルールがあるわけじゃない。

まあ、一部にはそういう考えたかのやつも居るだろうけど、それはそいつの考え方だ。

俺には俺の考え方があって、他人の考えに無理矢理同調させようとは思わない。

それに、根を詰めすぎてもいい結果は生まれない。たまにはガス抜きも必要だ。

このギルドの仕事を手伝っているのも、そういった側面での意味合いも兼ねている。

「よし、分かった。今回必要なもんは、俺たちが全て用意してやる、それもタダでだ」

「え!?!? タダ…ですか!?!?」

オヤジさんは俺たちの話を聞いて、一瞬だけ頭の中で逡巡した後いきなりそう言ってきてくれた。多分、彼の頭の中では俺たちの話と、リーブルの糸の情報を利益に還元する考えが構築されたのだろう。

隣では、シリぽんが素っ頓狂な声を出している。まあ、こういうった場面に慣れていないだけだろう。

やはり、正直に話すといいいことがある……まあ、いつもそうとは限らないわけだけど、今回はそれが功を奏したわけだ。

「ただ、条件付きだな」

「リーブルの糸の情報、フラグ構築方法、自生地区の情報を売ってことでしょう? それくらいは分かりますよ」

「流石に話が早いな。ま、そんなとこだ。もちろん、今回の採取分はお前さん方が好きに使ってくれていい。加えて、情報提供の報酬として100万コルだそう」

「ひゃ、ひゃく………?」

報酬の額に、シリぽんは最早、ポカンとした顔になってしまっている。流石に、今まで中層でのクエストに重視していたようなので、この額の報酬にお目にかかったことはそうなのだろう。

まあ、ここでの仕事では、最大この五倍くらいもらったことがある

のだが。

100万というのは、まあ妥当なところだろう。それに、マップやアイテムなども提供してくれるというのだ。小遣い稼ぎ十息抜きにはちょうどいいというか貰い過ぎかもしれない。

「かなり丈夫なと言うか……防具に使えばかなりいいものが作れそう。アイテムなんだろう？ そんなレア素材のアイテム情報、それもまだ誰も入手したことがないと来てる」

「売る情報の価値としては十分ってとこですかね」

「そういう事だ。売れ行きによっては、追加でお前らに報酬を払えるかもしれない」

「あはは、その時はありがたく頂戴することにしますよ。気になってる怪しいアイテムとかが何十個もあるんで、それ全部買えそうだ」

金はいくらあっても邪魔にはならない。この世界には財布という概念もないから、財布が重くなっただけでかさ張るという心配もない。

まあ、カツアゲや強盗に遭って、身ぐるみ剥がされてもするのなら、リアルと同じで奪われてしまうのだから。

それにしても、相変わらずオヤジさんは気前がいいというかなんと言うか……それくらい、ギルドの収益は潤いまくっているのだろうか。

商売上手と言うか何と言うか……リアルでもそういった方面で仕事でもしていたんだろう。

場数を踏んでいると言うか、そう言った風格のようなものがあるように感じる。

「あ、あの…！ ひゃ、100万って……ほんとにいいんですか……？ アイテムまでタダで……」

「はっはっは！ 嬢ちゃん、俺らがいつもこいつに払ってる報酬聞いているか？ 50万コルが平均ってとこだぜ？ それに、まだ見ぬ新アイテムの情報……こりゃあ、100万出しても釣りが来るかもしれないねえ。そう考えりゃあ、安いもんよ」

「は、はあ………」

ま、シリぽんの感覚が普通なんだろうな……。

俺も最近、ここでの報酬が如何に破格なのか分からん時があるし……。とはいえ、これで交渉、契約成立だ。

オヤジさんは俺らのクライアントに鞍替えってことだな。アイテム探索しつつ、小遣い稼ぎ……うーん、これぞゲームのサブイベントって感じだ。

「ってそう言やあ……41層の密林ダンジョンにヤバイモンスターが出るって噂があるんだがな……それが気に掛かるといえば掛かるんだが」

「ヤバイって……ボスクラスのモンじゃないでしょう？」

「それはそうなんだが、つい三日前、中層でそこそこの名が知れてるギルドの連中がパーティを組んで41層の密林ダンジョンに潜ってたらしいんだが、危うく全滅しかかったって話だ。モンスターの形状は巨人タイプってことらしい」

「ふむ……大方フラグMOBにでも当たったかですかね」

「恐らくな、お前さんなら心配ないだろうが、一応用心だけはしといたほうがいい」

オヤジさんが、思い出したように呟いたその話。

ダンジョン内でも、時たまともないレベルのモンスターが現れることがあるらしい。フラグMOBと言われる、ボスに次ぐ強さを誇っているモンスターなのだが、出現条件はランダムだったり定期的だったり、出現期間に制限があったりする。

恐らくは、その全滅しかかったパーティというのは、何かのフラグを知らない間に踏んだか、定期的にポップする奴に当たったんだろう。

「それから、最近はやけに【軍】の動きが活発になってきてるらしくてな。精鋭部隊を構築して、最前線に出てきたり、中層ダンジョンのアイテムを独占したりしてるらしいな。終いには、始まりの街では徴税なんて馬鹿な事をしてるらしい。ったく、世も末だぜ」

「ま、ゲームの中ですけどね。元々、軍なんて一部を除いて雑魚と馬鹿が群れてるだけでしょ。近い内に内部分裂するか、崩壊するんじゃないっすかね？」

「ゆ、ユウさん……結構辛辣ですね……」

「いやいや、ある意味的を射ているかもな。近頃、軍内部でも派閥争いと言うか、ギルドリーダーの座を巡っての嫌な話を腐るほど聞く。どっちみち、軍はもうそう長くないだろうぜ」

軍に対して、俺はあんまり良い感情を持っていないから、自然と言いがキツくなってしまうが、実際最近の軍は碌でもない奴らばかりだ。

あそこのリーダーやその周囲の人は、純粹にプレイヤーたちのためになろうとしているらしいが、組織が大きくなるにつれ、一枚岩のままにいるという事は非常に難しい。

自ずと、権力争いなんかが起こるのが世の常、長い長い人間の歴史を振り返ってみても、その類の話は腐るほど転がっている。

シリぼんを少し困った表情にさせてしまったが、オヤジさんも俺の意見に賛成らしく、最近の軍内部のことについて話してくる。

「アインクラッド解放戦線なんて、最初は高らかに謳ってはいたが、現実は今の状態だ。実際、解放のために戦ってんのはそこに居るユウ達みてえな攻略組がメインだ。デカイ組織だけあって、それなりの秩序みたいなもんをもたらししてるのかもしれないねえが……」

「不良攻略組の俺が言うのもおこがましい事っすけど、デカイ図体してるだけの連中って認識ですよ。皆口には出さないだろうけど、軍の専横に関しては苦い顔してるでしょうよ」

結局、ゲームの中でもリアルでも。人間のやることなんぞそう変わらない。

『他人より上に』・『他人より早く』・『他人より多く』・『他人より先へ』。人間の欲求の本質的なものが、このゲームの中でもその動きを活発にさせているということだろう。

もちろん、その欲求にも個人差があるわけだし、そういった欲求がある事自体は仕方のないことだし、逆になれば困ることもある。上昇志向無しに、人間の文明や経済の発達などはないのだから。

「ま、軍やフラグMOBには気を付けろってこった。無用なトラブルは回避するに限る」

「同感です。何より、シリぽんに怪我させるわけにはいかんですからね。HPバーを1ドットだって、減らさせてやらねーですよ」

「ユウさん……」

ふ……決まった……。これで、シリぽんの好感度が上がったな………
…そして、行く行くはフラグ構築が成立し、シリぽんルートに入るわけでございますよ……。

でもって、行く行くは………でへへww 言わせんなよ恥ずかしいww

さあゝて、シリぽん、まずはアクセントとして、この白スク水を着

て、プールサイドでお尻をこっちに向けてですな……

「……………ユウさんの変態……………」

「またしても心の中を読まれた!?!」

シリぽんの好感度が下がった……………。

畜生……………何がいけなかったんだ? 白スク水か? それともプールサイドでは流石にダメなのか……………?

お、俺の一体どこが間違っていると言うんだ……………?!

「はぁ……………相変わらずの馬鹿だよ、オメエも……………」

終いにはオヤジさんにもため息混じりで呆れられる始末……………。

なぜだ……………このクールで鰻背なナイスガイな、イケメン紳士であるこの俺が……………。

く、こんな辱めを（二人の冷たい視線的な意味で）……………。

「ふ、俺を倒しても、また第二、第三の俺様が……………」

「どこの魔王ですか……………」

その日……俺はシリぽんからの可哀想な人を見る目で呆れられ、好感度を上げること叶わなかった……。

ふ、ふふふふ……！！ つ、次の選択肢で汚名返上だ……僕、負けない、男の子だもん。

【ユウ視点 終わり】

ep7 Negotiation (後書き)

という訳で、アイテム収集が、お金になるお話になったわけでございます。というか、ユウもこれを見込んでいたりいなかったり……。

軍に関しては、私が小説を読んでいて思ったことを書いて見ました。二巻の短篇集で出てくる、軍のユリエールさんやシンカーさんはまともな人なんでしょうけどね。

一卷で出てくるコーバツとか……なんかもう、突っ込みどころがありすぎてもう……。

マップデータをタダで要求して、それがプレイヤーの義務だとか……お前は何様なのかとww

まあ、それが死亡フラグになったのかはわかりませんが、グリーンアイズ先生に叩きのめされたわけですが。

次回 ep8 Interval

ep8 Interval (前書き)

ひゃっはー、変態は消毒だー!!

という訳で、今回はユウさんにとっての天敵と言うか、苦手とする新女性キャラの登場でございますw

ユウさんのシリぽんへのセクハラもこれが最後に………なるわきやないです。

ep8 Interval

【シリカview】

「んゝ……思わぬ形で臨時収入の予定が立っちゃったなあ……。ま、俺としてはウエルカムな展開なんだけど」

「ですね……私的には、未だにユウさん達の金銭感覚に頭が付いて行かないですけど……」

「ま、金はいくらあっても邪魔にはならないからね。ここは、オヤジさんの厚意に甘えておくとして、折角の依頼なんだし確実にこなすことだけ考えよう」

ギルド、朧月夜でのお話、というか結果だけを見れば見事な商談になってしまっただけど、兎に角、それがとんでもない好条件でのお仕事にビフォーアフターして、若干混乱気味な私。

ユウさんはユウさんで、こういった展開は話には慣れているようで、いつもどおりと言うか特に変わった様子はない。

「本格的な探索は明日から何ですよね？」

「まあねゝ、そんな急ぎでもないし。明日の朝、オヤジさん達がポ

ーションとかマップとかのアイテムくれるって話だしな、のんびり行けばいいさ」

私一人だったら、焦って今日の内にダンジョンに乗り込んでいたかもしれないけど、ユウさんは冷静と言うか、自分のペースを崩さないタイプなんだろう。

あくまでマイペースに、今回の依頼をこなすつもりみたい。

でも、一緒に冒険する分には、ユウさんのようなスタンスのプレイヤーが居るのは心強い。

焦った頭を、それとなくクールダウンさせてくれるような、そんなタイプの人なんだ。

「もう昼も少し過ぎたくらいだし……一回今日の宿でも見に行こうか？」

「ですね。よく考えたら、お昼ごはんもまだですし」

このゲームの世界では、食べるという行為が、ある意味最も分かりやすい快感というか、満足を与えてくれる。

実際に胃の中に何かがあるわけじゃないけど、満腹感を味わえるだけでも、この世界ではありがたい事だろう。

本当なら、リアルで本物の食事を取りたいけど……、それはこの世界にいる大多数の人がそう思っているはずだ。

「うんうん、食事は大事だね。シリぽんもたーんと食べて、もっと大きくならないとね……………うん、おっぱいとか」

「こんなにストレートなセクハラ、生まれて初めてかもしれないです…………」

「そんなに褒めないでくれよ、照れるじゃないかWWW」

「褒めてないですからね!？」

はぁ……………なんだか、ユウさんのセクハラにも慣れ始めてる私がいる…………。人間の環境適応能力というか、慣れって言うのは怖い。

……………でも、確かに胸はもう少し大きくなって欲しいかも…………。

「バストアップは任せろー。ばりばり」

「やめて!……………って、何言わせるんですか!？」

「いや、シリぽんなら乗ってくれるかなあと……………。うん、やっぱ俺とシリぽんは相性がいいっぱいな。これはきつと、体の相性も…………」

「それ以上言ったら、今日の宿が冷たい牢屋に早変わりですよ?」

「サーセン」

もう…………。

ほんと、ユウさんってセクハラ魔人…………。さっきは、私に傷一つ付けないって言うてくれた時は…………その、格好よかったのに…………。

本当に、残念なイケメンってユウさんのためにあるような言葉だと思わざるをえない。

そして、そのまま二人でアルゲードの混雑した道を進み、漸く人通りが落ち着いた通りに出たとき…………。

私達の背後から、ユウさんの名前を呼ぶ声が響いた。

「あら、ユウじゃない？」

「げ…」

「?？」

掛けられた声に聞き覚えがあるのか、ユウさんは物凄く嫌そうな顔をする。聞いたただけだと、女の人の声みただけど…………？

声の主が誰なのかを確かめるために、私が後ろを振り返ると、そこには長い金色の髪をサイドポニーにし、パツと見気の強そうな目鼻立ちをした女の人が呆れた表情をしながら立っていた。

彼女のバランスのとれたスタイルを包む装備は、全体的に黒っぽいカラーが目立つ。スピード重視なのだろうか、軽装な感じがするボディアーマーにスカート。黒のニーソックスでスラっとした足を包

んでいる。

女の私から見ても、息を吞んでしまうくらい綺麗な女性だった。

「全く……近くに寄ってたなら、連絡くらい寄越しなさいよって言うてるのに……」

「お前に捕まると話が長くなるだろうが……」

「貴方が逃げようとするから、話が長くなるんでしょう？ ホント、ヘタレよね」

「ヘタレ言うな！！ いざという時は、しっかりきらめくからヘタレじゃねーし！！ はい論破したー！！」

ジト目のまま、その女の人はユウさんに毒々しい言葉を投げつけ、ユウさんもそれに反抗しているけど……ユウさん、どこをどう論破したのか、一般ピーポーな私には分かんないです……。

でも、この様子から察するに……この女の人とユウさんは知り合いなんだろう。それも、結構昔からの知り合いみたいだし……。

「幼稚園のとき、チワワに吠えられて、ピーピー泣いてたのはどこの誰だったかしら？ しかも、女の私の背中に隠れて……」

「ああああああ！！！！ 分かった、俺が悪かった！！ だから昔の話をするのやめてくれええええ！！！！ お願いします、マジで靴でも何でも舐めますから！！」

「え？ いやよ、貴方が泣き叫ぶ顔を見るのが私の生き甲斐なんですもの」

「コイツ変態だあああああ！！！！！！」

ユウさんが…ユウさんが頭を抱えながらシャウトしてる…………。いつもは余裕たっぷりな感じで、絶対に自分から崩れたりしない人みたいなのに…………。

ていうか、ユウさん…………ユウさんが他の人を変態呼ばわりするのは、さすがに憚られるような気がするんですけど。

「で…………、連れの子がポカンとしてるけど、放置しててもいいのかしら？」

「おっと…………俺としたことが…………。いつものクールで鯔背なナイスガイに戻らねば…………キリリッ」

「あ、ユウさん…………気合を入れて格好つけてるところ申し訳ないんですけど、もう取り返しが付かないくらいに、ユウさんがヘタレだということが明らかになってます…………」

「ガッデエエエム！！！！」

そのまま、ユウさんは道のど真ん中で崩れ落ち、『Orz』の形になって何やらぶつぶつと独り言を言い出した。

やれ『生まれてきてごめんなさい』だの、やれ『皆さんと同じ空気を吸っててごめんなさい』だの……かなり、末期症状に侵され始めていた。

「はあ…あいも変わらずめんどくさい男ね……と…、私は『ミズキ』。このバカの幼馴染やってるの。貴女は？」

「あ、はい！ 私はシリカって言います。 ちょっと縁があって、ユウさんに助けていただいて、しばらく一緒にパーティを組むことになって……」

「なるほどね……。こいつにセクハラ………ああ、されたみたいね……」

「あ…分かります…？」

ミズキさんは、私のことを見てから、ユウさんにゴミくずを見るような視線を送りながらそう言うて来る。

私がセクハラを受けまくっていることまで、人目で判断できるのだから、幼馴染スキルというものがあるのではないかと思えてしまった。

まあ、ユウさんの人となりをよく知っているようなので、そこから簡単に彼の行動を予測出来たのだろうけど。

「ま、幼稚園からの付き合いだしね……。こいつのちゃらんぽらんなところも、女好きなところもよく知ってるつもりよ。その度に、

私が精神的に追い詰めて遊んでるんだけどね」

「あ、あはは……」

うん、今確信した……。

ミズキさん、絶対にドSだ。

ユウさんもかなりのSだけど、ミズキさんをは更に和を掛けたレベルにヒドイと言うか、完成度が高いと言うか……。

絶対に敵に回したくない相手だと、本能的な何かが叫んでいる。

「で、こんな可愛い子とパーティ組んで、今回は何をしようとするのかしら？ 答えなさい、ヘタレ」

「は、はい……！ 実を言うとあっし達、『リーブルの糸』っていう未発見アイテムを探そうってことになりました……そいで、今さっき情報一式の確保と、今回の件を正式な仕事として朧月夜の旦那から引き受けてきた所でござえます……へへへ」

なんか、ユウさんが物凄く謙ってる??！ ていうか、傍目から見たら主君と臣下みたいなの……ううん、女王様と奴隷みたいな構図に見える!?

ユウさん、ミズキさん相手だと物凄くヘタレになっちゃうんだ……。

「へえ〜?」

未発見アイテムねえ……?」

それも、オヤジさんか

ら正式な依頼として…………ふふ〜ん？」

「あ、あのお…………？ 如何なさいましたでございましょうか、ミズキ様？」

「軽々しく私の名前を呼ぶんじゃないわよ、ヘタレ。女王様と呼びなさいな」

「ははっ、女王様！！」

「完全に調教されてる！？」

この二人、幼馴染と言うか……………SMチックな関係にすら見えてしまうと言うか…………。

でも、こういうやり取りが似合うっていうか…………物凄く自然体って感じがする。

自然体の形が、SM女王様プレイっていうのはちょっとアレだけど…………。

「ちょうど私も退屈してたところなのよね…………」

「え…………ええと…………。女王様？ 何をお考えなのか、この卑しい卑しい豚めに、御教え願えないでございましょうか…………へへへ」

「簡単な話よ…………ユウ、その仕事、私も連れて行きなさい」

ミズキさんは、ものすごく楽しそうな、というか面白そうなモノを見つけたと言わんばかりの表情で、ユウさんに総提案した。目は完全に命令する人のそれだったけれど、ミズキさんの女王様基質というもののだろうか……物凄く様になっていた。

「あゝ、で、でも……女王様の御身を危険に晒すような事は……」

「黙りなさい、ヘタレ。私の腕は、あんたが一番良く知っているはずよね？ それに、これはお願いじゃないのよ？ め・い・れ・い」
♪

「はは、はい……女王様の御心のままに……ぐすん」

ついには、ユウさんが半べそ状態にまで……。ミズキさん、完全にユウさんを手玉に取ってるっていうか……。

うん、どっちかって言うヒエラルキーに於いて完全に上に立つポジションを抑えている感じだ。

カッコイイ女性というのは、ミズキさんのような人の事を言うのだろうか……？

あれ、ちよつと違う気がしてきたかも……。

「という訳で、シリカちゃんと、頭の上の可愛いドラゴンちゃん？」

「は、はい！」

『きゅ、キュイ！』

「これからよろしく頼むわね？ 私も、このヘタレほどじゃないけど、それなりに戦えるから、戦闘ではアテにしてくれていいわ」

「はい。こちらこそ、よろしく願います。ミズキさん♪」

『キュルル〜♪』

でも、こうして同性のプレイヤーの、それも頼りになるオーラ全開のお姉さんがパーティに加わってくれるのは、正直心強い。

ユウさんのセクハラも、予防と言うか、見つけ次第潰してもらえそうだし……。

ま、まあ…ユウさんに対する加虐思考はちょっと可哀想だから、危なくなったら止めるくらいはしてあげよう……。

「…………あ、そう言えば女王様…？ 【カリン】の奴はどうしたの？
でございましょうか？ 一緒ではないので？」

「あの子は相変わらずの引き籠もりよ。今日も、様子を見に行っただけどね…………。あ、それとその喋り方キモイからやめて頂戴。
女王様呼びもそろそろ飽きたから、もうイイわ」

「ホントお前ってフリーダムだよな、昔から！！？ 俺がそのフリーダムさに、何回全力で泣かされたことか……………」

ミズキさんとユウさん、昔からずっとこんな感じなんだ……。というか、泣かされたって、ユウさん自分でヘタレなところをカミング

アウトしちゃってますけど……。

でも、ユウさんの口から出てきた、【カリン】という名前に、私は少し引っかけた。十中八九、二人の共通の知り合いなんだろうけど……。引き籠もりってどういうことだろう？

「あの、そのカリンさんと言うのは……？」

「ああ、私達の友達っていうか……リアルでの学校のクラスメイトなのよ。ゲーム開始と同時にくらいにばったり会って……。……ま、イロイロあって今はHI☆KI☆KO☆MO☆RIってわけ」

「そうなんですか……」

何があったのか……そんなことを聞けるはずもないし、それはおこがましい事だ。このデスゲームに参加させられて、精神を病んでしまったのかもしれないし、実際にそうってしまった人達も数多くいる。

このゲームで【生きている】人達、皆が皆、精神が、心が強いわけじゃない。

引き籠もりになってしまうほどの何かが……。あつたんだろう。

「さ、話も纏まったことだし、そろそろ今日の宿で明日の事について話しましょうか？　もういい時間だし」

「賛成です、ミズキさん」

ともあれ、仲間も増えて、明日からのダンジョンへの冒険への展望も明るくなったことだけはハッキリしている。

私とミズキさんは、揃って今日お世話になる宿を探しに、アルゲードの街を練り歩くことにした。

あれ？ 誰か忘れてるような……？

「くおらああああ！！！！ 何で俺のことはスルー！？ 放置か、放置プレーなのか！？ よっしゃあ、それならそれでバッチコイ！！！！」

「シリカちゃん、見ちゃダメよ？ 反応したらつけ上がるから」

「は、はい……」

あ、ユウさんのこと完全に忘れてた……。ミズキさんのインパクトが強すぎたのかもしれないけど。

私達の背後で、何やらテンション上げながら叫び倒しているけれど、ミズキさんの言うとおり、これは反応したら、ツツコミを入れたら負けだと本能が告げていた。

「おい！！ 無視すんなー！！ いいのか？ 俺は寂しいと死んでしまう、ウサギ並みにデリケートな心の持ち主なんだぞ！！ か弱いんだぞー！！」

うん……何ていうか……今日のユウさんは、
なんだか猛烈に面倒くさかったです……。

【シリカview end】

ep8 Interval (後書き)

はい、という訳で新キャラミズキの登場でしたww
ユウさんの天敵という感じの、女王様系幼馴染でございます。

次回からは、本格的にダンジョンへの冒険スタートになります。
やっと、戦闘シーンとかに移れますね……どんだけゆっくりな進行
スピードなんでしょう(；・∀・)

次回 ep9 Dungeon

少し、卒論の制作で忙しくなるので、ソードアート・オンライン小説の更新がかなり不定期になる予定です。

楽しみにしていただいている皆様には申し訳ないのですが、何卒ご了承くださいませ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965w/>

ソードアート・オンライン ～Clownlike wolf and Girl～

2011年10月25日17時48分発行